

山形県埋蔵文化財調査報告書第12集

# 分布調査報告書(4)

—東北横断自動車道酒田線関係遺跡—

山形県教育庁文化課

財団法人  
山形県埋蔵文化財センター



6-1989-395-01

山形県教育委員会



# 分布調査報告書(4)

—東北横断自動車道酒田線関係遺跡—

昭和 52 年 3 月



教育部文化課

089 - 395

# 序

本報告書は、昭和50・51の両年度にわたり実施をした、東北横断自動車道酒田線のうち山形市～寒河江市間16kmの計画予定路線についての埋蔵文化財包蔵地分布調査結果についてとりまとめたものであります。

横断道酒田線は山形市笹谷峠から月山を越え酒田市に至る延長100余kmの計画路線であります。このうち整備計画区間となった山形市滑川～寒河江市高屋間16kmについて、昭和50年度は2,000m巾で分布調査を行ない54ヶ所の遺跡を確認しております。昭和51年度においては県土木部から明示された200m巾の予定線内に所在する10遺跡について一部試掘を行ない、遺跡の性格とその範囲を明らかにするための調査を実施したものであります。

本路線は、すでに開通をみている東北縦貫自動車道と宮城県村田インターチェンジで結ばれ、太平洋地帯の各地を始め、関東地方経済圏との最短路線となる本県初めての本格的ハイウェイであり、県内の産業・経済・文化の振興に課す役割りは、はかり知れないものがあるかと思われます。

しかしながら、反面においては、これらの大規模な開発事業と埋蔵文化財とのかかわりが近年とみに増加の傾向にあり、県民の福祉の向上を目的とした諸開発と、幾千年を経た先人の足跡をしのばせる埋蔵文化財の保護行政との間には、数多くの困難な問題をかかえており、県教育委員会においても、これらの間の調整をはかるため、今後とも多くの努力を続けてまいらなければならないところであります。

本書は埋蔵文化財に対するおおかたのご理解の一助になればと念じ、なお、本調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝を申し上げます次第であります。

昭和52年3月

山形県教育委員会

# 例 言

- 1 本報告書は、昭和51年度に国庫補助を得て実施した。東北横断自動車道酒田線関係遺跡の分布調査ならびに試掘調査の記録である。
- 2 調査は、山形県教育庁文化課の佐藤鎮雄・佐藤庄一・野尻 侃・尾形興典・佐藤正俊・名和達朗の6名が担当した。
- 3 本報告書の執筆および編集は佐藤庄一が担当した。
- 4 調査にあたっては、武田好吉氏（山形市文化財専門委員）、加藤 稔氏（山形県立山形工業高等学校教諭）のご指導をいただいた。記して感謝を申し上げる。
- 5 本報告書の作成にあたって青木敏雄氏（山形大学学生）より実測図作成について協力を得た。
- 6 遺物の実測図・拓本図は3分の1、遺跡の地形図は5千分の1を原則とした。
- 7 遺跡の範囲は、遺物の表面採集から確認できた地域を図示したが、範囲が明らかでない遺跡については、便宜的に円で示してある。

# 目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
II	東北横断自動車道関係遺跡地名表	4
III	東北横断自動車道関係遺跡試掘調査概報	
1	にひやく寺遺跡	16
2	上原古墳	20
3	高原古墳	24
4	御花山古墳群	26
5	塚田A・塚田C遺跡	28
6	物見台遺跡	30
IV	東北横断自動車道関係遺跡分布図	33

# 挿 図 目 次

第1図	東北横断自動車道計画路線図	3
第2図	にひやく寺遺跡地形図	17
第3図	にひやく寺遺跡出土遺物(1)	18
第4図	にひやく寺遺跡出土遺物(2)	19
第5図	上原古墳地形図	21
第6図	上原古墳現状図	22
第7図	上原古墳土層柱状図	23
第8図	上原古墳石棺実測図	23
第9図	高原古墳地形図	25
第10図	高原古墳石棺実測図	25

第11図	御花山古墳群分布図	27
第12図	塚田A・塚田C遺跡地形図	29
第13図	物見台遺跡地形図	31
第14図	物見台遺跡A トレンチ平面図	32
第15図	物見台遺跡出土土器	32
第16図	東北横断自動車道関係遺跡分布図(1)	34
第17図	東北横断自動車道関係遺跡分布図(2)	35
第18図	東北横断自動車道関係遺跡分布図(3)	36
第19図	東北横断自動車道関係遺跡分布図(4)	37

## 図版目次

図版 1	にひやく寺遺跡近景	にひやく寺遺跡A トレンチ状況
図版 2	にひやく寺遺跡出土遺物(1)	
図版 3	にひやく寺遺跡出土遺物(2)	
図版 4	上原古墳近景	上原古墳A トレンチ状況
図版 5	上原古墳A トレンチ地層断面	上原古墳石棺状況
図版 6	高原古墳石棺状況	御花山古墳群遠景
図版 7	塚田A 遺跡近景	塚田A 遺跡A トレンチ状況
図版 8	塚田C 遺跡近景	塚田C 遺跡トレンチ状況
図版 9	物見台遺跡近景	物見台遺跡トレンチ状況
図版 10	物見台遺跡出土遺物	物見台遺跡出土遺物
図版 11	物見台遺跡出土遺物	

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

東北横断自動車道酒田線は、宮城県仙台市から山形県酒田市まで総延長約156 kmにわたる将来の県内の基幹高速道路である。このうち県境の笹谷峠付近6.7 kmと月山沢～田麦俣間20.8kmは、昭和46・年以來建設省によって施工されている。

今回分布調査を実施した山形市滑川から寒河江市高屋までの約16km区間は、昭和48年10月19日に整備計画が決定され、同日建設大臣から日本道路公団に対し施工命令（第7次）が出されている。山形県ではこれを受けて県段階で県試案ルートを現在作成中であるが、それまでの過程には地形、文化財、関連公共事業など種々の事項との調整が必要であり、本調査もその一環として実施されたものである。

県試案ルートによれば、東北横断自動車道酒田線は、4車線幅約53mの広がりを持ち、山形市滑川からほぼ北西方向に同市高原、見崎、中山町文新田付近を経て、寒河江市高屋に至る（第1図）。経過市町は山形市、中山町、寒河江市の二市一町である。

昭和49年9月に山形県土木部長から山形県教育長あてに「東北横断自動車道酒田線の関連公共事業について」の問い合せがあり、これにもとづいて昭和50年度に分布調査、昭和51年度に試掘調査を実施した。

## 2 調査の経過

分布調査は県教育委員会が主体となり、昭和50年5月15日～30日および同10月13日～17日までの実質11日間にわたって実施した。区間は山形市滑川から寒河江市高屋までの約16 kmで、調査範囲は推定路線を中心として片側1 km、両側で約2 kmを対象としている。

調査にあたっては、5000分の1の図面を基準にできるだけ遺跡の範囲を記入するように努めたが、範囲が明らかでない遺跡については便宜的に円で図示してある。これは遺跡の地目が水田や果樹園などになっていて、遺物の散布範囲がつかめないためである。

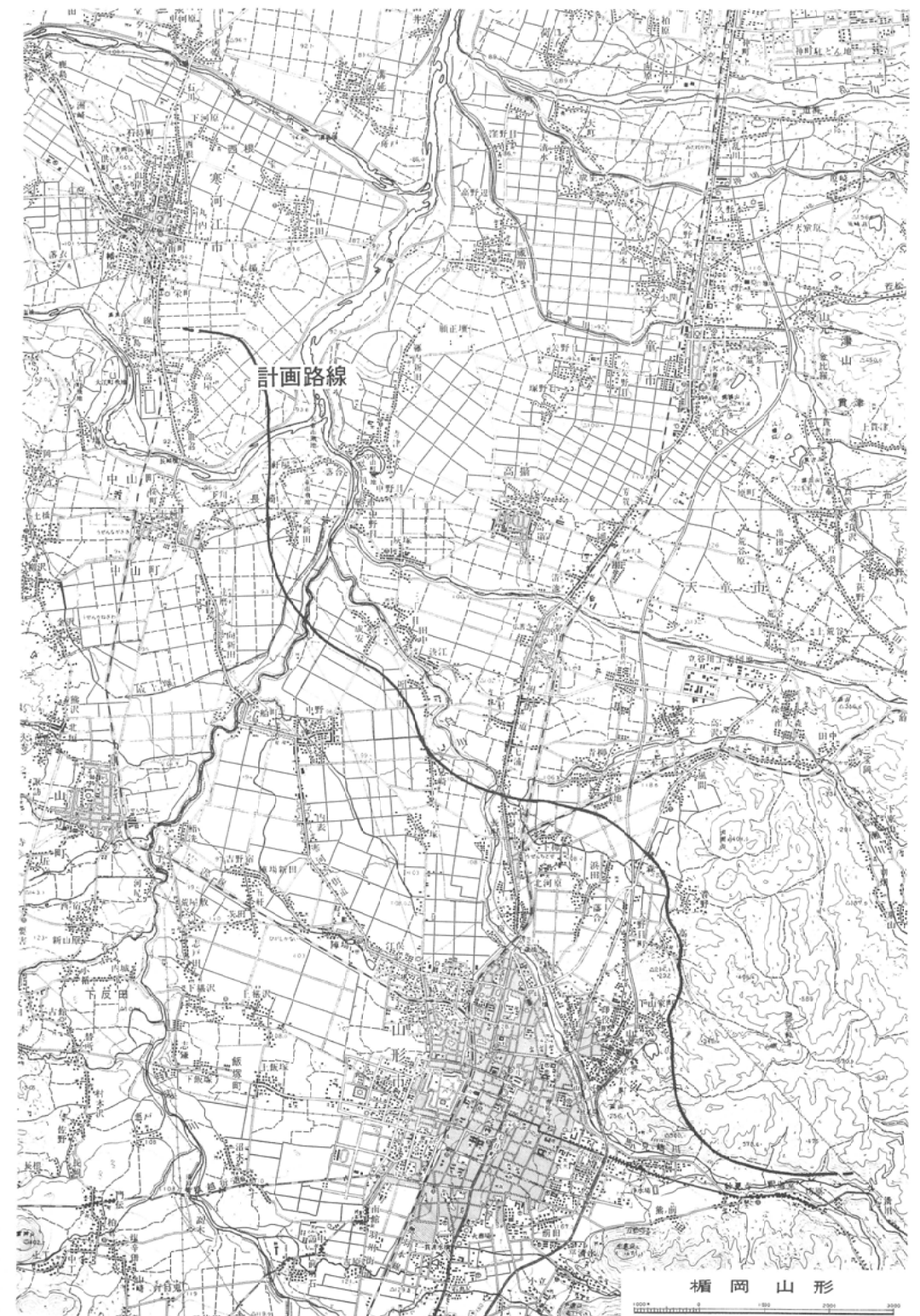
調査の結果対象地域に54の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）が発見され、そのうち20遺跡が今回の調査で新規に確認されたものである。行政区域でいえば山形市分48ヶ所、中山町分6ヶ所となる。寒河江市内からは今回の調査区域では発見できなかった。

遺跡は、丘陵先端には縄文時代の集落跡と古墳が多く、扇状地や河川の旧氾濫原などの沖積地には弥生時代から平安時代にかけての集落跡が多く分布する。とくに山形市高原付近と七浦付近には弥生時代から奈良時代までの遺跡が密集して認められた。両地域とも県内における水稻農耕の出現と展開を考えるうえで重要な場所である。



その後昭和51年3月になってさきの県試案ルートが200 m幅に狭められ、この中に10遺跡がかかることになったため、昭和51年に国庫補助を得て試掘調査を行なった。試掘調査は県教育委員会が主体となり、昭和51年10月12日～同23日までの実質11日間にわたって実施した。対象遺跡は山形市にひやく寺遺跡、同上原古墳、同塚田A遺跡、同塚田B遺跡、中山町物見台遺跡の5ヶ所である。試掘調査の結果は第Ⅲ章で後述するが、にひやく寺遺跡と物見台遺跡では当初の予想以上の内容が検出されている。また他の3遺跡についても残る5遺跡と合せ慎重な対策が必要である。

なお分布調査における遺跡の推定範囲は、あくまで地表面の遺物の散布状況を目安にしたものであり、今後若干の修正がなされることを付記しておく。



第1図 東北横断自動車道計画路線図

## Ⅱ 東北横断自動車道

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
1	集落跡	釈迦堂裏	山形市釈迦堂字南在家	畑	縄文 平安～鎌倉
2	集落跡	尺ノ上	山形市滑川字尺ノ上151地	畑 水田	縄文
3	集落跡	西ノ沢	山形市釈迦堂字西ノ沢	畑 カヤ場	縄文
4	集落跡	にひやく寺	山形市上山家町字大網	畑	縄文 (早期) (中期)
5	散布地	大網B	山形市上山家町字大網	畑	縄文
6	墳墓	上山家	山形市上山家	畑	奈良
7	集落跡	大野目	山形市大野目字堅田	畑	平安
8	古墳	上原古墳	山形市高原字上原	畑	奈良
9	墳墓	小山	山形市高原字小山	山林	奈良

# 関係遺跡地名表

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
内山川右岸の畑および桑畑に遺物がまとまって散布。範囲は約南北100m×東西120m。	縄文式土器（中期） 須恵系土器	新規発見	16-1
滑川部落の北西裏、昭和32年頃の家屋移転の際に遺物出土。現在は水田となっており遺物発見できず。	縄文式土器 石鏃・磨製石斧	新規発見	なし
所有者からの聞き込みでは、戦前カヤ場より石器が多量に出土とのこと。現在は遺物表採できず。	石鏃	新規発見	16-3
沼の辺湖の東方300mの畑地およびホップ畑に遺物が多く散布。範囲は約南北100m×東西80m。	縄文式土器（早期） （中期） スクレイパー他	新規発見 予定路線内 試掘調査実施	16-4
にひやく寺遺跡のさらに東方400mの山腹に立地。道路南脇の畑から遺物少量出土。	石器剥片	新規発見	16-5
	須恵器 土師器 直刀	註1 No.1484	17-6
山形バイパス手前の国道13号線西側以前水田だった所を畑にしたもので、今回は遺物表採できず。	土師器	註1 No.1450	17-7
市営上水道建設で畑を深く掘った際に石棺出土。石棺は移築され現在浄化槽東隣の道路脇にある。	なし	註1 No.1482 予定路線内 試掘調査実施	17-8
高原町東方の丘陵山頂に立地。農作業中に石棺が1基発見され、その周囲から須恵器も出土している。	須恵器	註1 No.1476	17-9

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
10	墳墓	高原	山形市高原字小山998-4	山林畑	
11	集落跡 祭祀	鷺ノ森	山形市鷺ノ森	果樹園	古墳
12	古墳	御花山	山形市青野字御花山933他	山林畑	奈良
13	集落跡	寺西	山形市風間字寺西	畑	平安
14	集落跡	一本木A	山形市青柳字一本木	畑 果樹園	平安
15	集落跡	一本木B	山形市青柳字一本木	畑 果樹園	平安
16	古墳	風間A古墳	山形市風間	畑	古墳
17	古墳	風間B古墳	山形市風間	畑	古墳
18	祭祀	国司壇	山形市上山家町	畑	奈良
19	集落跡	下柳柳 A	山形市字下柳	水田	古墳

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
昭和24年の農作業中に石棺を発見。現在は石棺のみがコンクリート柵で保護され、古墳の立地する丘陵は%程削平		註1 No.1480 予定路線内 山形県指定史跡	17 - 10
山形バイパス大野目町の東側丘陵山頂に立地。現在は土採り作業によって完全に消滅。昭和42年に発掘調査。	土師器(古墳) 須恵器 子持勾玉	註1 No.1468	17 - 11
青野、風間部落の中間に位置する小丘陵の山頂付近に立地。大正年間に39基確認されたが現在は10数基を残すのみ。	土師器(奈良?) 須恵器 石製品	註1 No.1478	17 - 12
一本木部落東南方のイチゴ畑全面に遺物が散布。範囲は約南北160 m×東西250 m。	土師器(平安) 須恵器	新規発見	なし
楯山小学校の南西200 mの畑に遺物が多く散布。耕作時には焼土も発見されるところのこと。範囲は約150 m四方。	土師器(平安) 須恵器	新規発見	なし
楯山橋の南西250 m、青柳部落に通じる農道の西側に遺物散布。範囲は約南北100 m×東西130 m。	土師器(平安)	新規発見	17 - 15
昭和36年の上水道工事中に、地下約40 cmの所から直刀が一振出土。間所免古墳ともいう。	直刀	註1 No.1479	なし
青柳街道農協前の貯水地(防火用水地)から石棺を1基発見。現在石棺の所在は不明。		註1 No.1483	なし
印役町3丁目、神明神社地内。今回は現地踏査をせず。	土師器 須恵器 蕨手刀	註1 No.1452	17 - 18
昭和39年の耕地整理の際、遺物と焼土が多量に出土。土師器には高杯、甗などの器形がある。水田のため範囲不明	土師器(古墳) 須恵器	新規発見	17 - 19

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
20	古墳	白山堂前	山形市字下柳	畑	古墳
21	墳墓	下柳 B	山形市字下柳	水田	歴史
22	集落跡	五反	山形市七浦字五反	水田 宅地	古墳
22	集落跡	七浦一ノ坪	山形市七浦字一ノ坪	水田	弥生
24	集落跡	下柳 C	山形市下柳	水田	? 煩
25	集落跡	大明神	山形市七浦	水田	?
26	集落跡	漆山	山形市漆山字北道上49	畑 宅地 原野	弥生
27	集落跡	北道上	山形市漆山字北道上	畑 宅地 原野	平安
28	古墳	衛守塚 2号古墳	山形市漆山字道下2691	水田	古墳
29	集落跡	衛守塚	山形市漆山字井森塚	水田 畑	平安

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
羽前千歳駅の東南600m、奥羽本線と仙山線に囲まれた畑地にある。古墳石棺の蓋石と考えられる板石が多数出土		新規発見	17 - 20
下青柳部落から仙山線を渡る踏切の北側水田に位置する。昭和39年の耕地整理の際、五輪塔が多く出土。		新規発見 予定路線内	17 - 21
南出羽駅の南西250m、宅地裏の水田に位置する。昭和39年の耕地整理の際遺物が出土。	土師器 須恵器	註1 No.48	17 - 22
南出羽駅の南方200m、線路西隣の水田に位置する。今回は遺物を採集できず。	弥生式土器 (後期)	註1 No.27	17 - 23
奥羽本線と高瀬川の交差点の東方100mに位置する。高瀬川の復旧工事の際土器が出土。	土師器	新規発見	17 - 24
南出羽駅の北方100m、線路東脇の水田に位置する。昭和39年の耕地整理の際、遺物が出土。	土師器	新規発見	17 - 25
奥羽本線漆山駅の北方200m、水田および宅地下に位置する。	弥生式土器 (中期)	註1 No.24	18 - 26
淡山駅の西南300m、工場南側の水田および宅地下に位置する。	土師器 (平安) 須恵器	註1 No.51	18 - 27
出羽小・中学校の北方50mの水田に位置する。明治12年に発掘調査され割竹形木棺と副葬品が多く出土した。	須恵器 割竹形木棺 弓残片	註1 No.36	18 - 28
出羽小・中学校南隣の校地および水田に位置する。校地造成の際、土器や石棺が出土。	土師器 (平安)	註1 No.36	18 - 29

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
30	集落跡	井森塚	山形市漆山字道西2691	水田 畑 宅地	弥生
31	散布地	千手堂大門	山形市千手堂字大門	水田 畑	平安
32	集落跡	南河原	山形市漆山字塚田	畑 宅地	弥生
33	古墳	狐山2号墳	山形市漆山字塚田	水田	古墳
34	集落跡	七浦	山形市七浦字牛ヶ墓	水田 畑	弥生
35	古墳	狐山古墳群	山形市七浦字牛ヶ墓851	水田 畑	古墳
36	集落跡	塚田 A 墳	山形市長町字塚田	水田 畑	平安
37	散布地	塚田 B 墳	山形市長町字塚田	水田 畑	平安
38	集落跡	塚田 C 墳	山形市長町字塚田	水田 畑	平安
39	集落跡	見崎	山形市字見崎53	宅地	平安

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
出羽小・中学校の北西200m、母子寮南側の畑地に位置する。	弥生式土器（後期）	註1 No.66	18 - 30
千手堂部落の東南の畑に遺物が散布。	土師器（平安）	註1 No.47 須恵器 陶器	18 - 31
千手堂部落の西方400mの畑および水田に立地。昭和43年の豚舎増築の際、弥生時代後期の合口甕棺が発見された	弥生式土器（後期）	新規発見	18 - 32
南河原遺跡に隣接する水田から石棺1基出土。現在石棺は千手観音堂に移築されている。		註1 No.37	18 - 33
狐山古墳群東方の水田に立地。昭和36年の耕地整理の際土器が多量に出土し発掘調査を実施している。	弥生式土器（後期） 石庵丁	註1 No.25	18 - 34
千手堂部落と馬見ヶ崎川の間、通称狐山と呼ばれる塚を中心に石棺が多く発見されている。	土師器 須恵器 子持勾玉	註1 No.37	18 - 35
馬見ヶ崎川の自然堤防上の畑および水田に位置。昭和36年の暗渠工事の際、遺物が多く出土した。	土師器（平安） 須恵器	新規発見 予定路線内 試掘調査実施	17 - 36
馬見ヶ崎川の自然堤防上の果樹園および水田に位置する。	土師器（平安） 陶器	新規発見	18 - 37
見崎浄水場西側の果樹園および桑畑に位置。周囲の水田面より一段高くなっており、全面に遺物が分布する。	土師器（平安） 須恵器 陶器	新規発見 予定路線内 試掘調査実施	18 - 38
見崎公民館の南側に位置し、宅地造成の際遺物が出土した。	土師器（平安） 須恵器	註1 No.58	18 - 39

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
40	集落跡	天神	山形市天神	畑	平安
41	集落跡	新井田	山形市中野字新井田	畑	平安
42	集落跡	渋江	山形市渋江字田中97	畑 果樹畑	古墳
43	集落跡	八幡田	山形市成安字八幡田319	水田	平安
44	集落跡	達磨寺2	東村山郡中山町達磨寺	畑 果樹畑	奈良
45	集落跡	川端	東村山郡中山町川端	水田 畑	平安
46	集落跡	御花山	山形市青野字お花山	畑	弥生
47	集落跡	長町	山形市長町字東浦	畑	弥生
48	集落跡	小白川向山	山形市小白川字向山	果樹畑	平安
49	集落跡	服部	山形市中野字服部	水田 畑	平安

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
山形市立第7中学校南方の果樹園および桑畑に遺物が多く散布。範囲は約南北150m×東西110m。	土師器(平安) 須恵器	新規発見	18-40
山形市立第7中学校北隣の果樹園および桑畑に遺物が多く散布。範囲は約南北120m×東西160m。	土師器(平安) 須恵器	新規発見	18-41
諏訪橋の西方150m、馬見ヶ崎川の旧氾濫原上に立地する。今回は遺物採集できず。	土師器 須恵器	註1 No.59	18-42
成安部落の西方500m、須川の旧氾濫原上に立地する。水田のため今回は遺物表採できず。	土師器	註1 No.57 予定路線内	18-43
須川左岸の旧氾濫原上に立地する。現在果樹園となっているため遺物表採できず。	土師器	註1 No.592	18-44
川端部落のすぐ北側、最上川右岸の旧氾濫原上に立地。畑地および果樹園に約150mの範囲で遺物散布。	須恵系土器(平安) 須恵器	新規発見	19-45
青野部落の北方200mの畑にある。昭和30年頃に遺物が多く散布し、川崎利夫氏による報告がある。	弥生式土器(後期)	註1 No.23	17-46
羽前千歳駅の南方350m、線路西脇の畑に遺物散布。周辺の宅地化が進み、遺跡の一部が破壊されている。	弥生式土器(後期)	註1 No.1445	17-47
馬見ヶ崎川の右岸、山形市民プールの北東裏に位置する。現在ブドウ畑になっていて遺物を表採できず。	土師器 須恵器	註1 No.1496	16-48
中野部落の東方約500mの水田および畑にある。今回は遺物表採できず。	土師器 須恵器	註1 No.56	18-49

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	地目	時期
50	集落跡	達磨寺1	東村山郡中山町達磨寺字須川	畑	古墳
51	集落跡	川前	東村山郡中山町長崎字川前	畑	奈良
52	散布地	三軒屋	東村山郡中山町長崎	畑 宅地	平安
53	集落跡	物見台	東村山郡中山町長崎	畑	古墳 平安
54	集落跡	春日堂	山形市中野字上敷色152	水田	古墳

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
須川の左岸旧氾濫原上に位置する。現在果樹園となっていて遺物表採できず。	土師器	註1 No. 590 予定路線内	18 - 50
須川の左岸旧氾濫原上に位置する。現在果樹園となっていて遺物表採できず。	土師器	註1 No. 593	18 - 51
三軒屋部落の中央北側に位置する。近年牧畜用のサイロを建てた際に遺物が出土。	須恵器	新規発見	19 - 52
三軒屋部落の西方200 m、周辺の水田より一段高い小台地の全面に遺物散布。範囲は約南北120 m×東西200 m。	土師器（古墳） 須恵器 紡錘車	註1 No. 591 予定路線内 試掘調査実施	19 - 53
須川の右岸自然堤防上に位置する。現在果樹となっていて遺物表採できず。		註1 No. 55	18 - 54

註1 山形県教育委員会「山形県遺跡地名表」 1963



### Ⅲ 東北横断道関係遺跡試掘調査概報

#### 1 にひやく寺遺跡

にひやく寺遺跡は、山形市沼の辺湖の東方300mに位置する。山形市東部にのびる神室山系の山麓にあたり、三方を山に囲まれた標高175mの北緩傾斜面にある。三方の山々は南側を関根山、東側を明神山、西側を虚空蔵山と呼び、その間を大網川が縫うように流れている。遺跡はこの大網川左岸の小扇状地上に立地し、地目は現在ポップ畑と野菜畑になっている(第2図)。土地所有者が古くから遺物を採集し武田好吉氏も一度試掘調査を行なっているが、昭和37年の「山形県遺跡地名表」には登録されておらず、正式には今回の分布調査ならびに試掘調査によって確認されたことになる。

試掘調査のトレンチは緩傾斜面の上・中・下段に3本設定した。上から順にA・B・Cトレンチと名付け、A・Bトレンチは南北4m×東西1.5m、Cトレンチは2m四方の大きさである。地層はⅠ層—耕土、Ⅱ層—黒褐色礫含み微砂 Ⅲ層—暗褐色砂礫となっており、Ⅱ層が遺物包含層、Ⅲ層以下が無遺物層である。包含層の厚さは浅い所は5cm程であるが最深部では50cmを測る。調査の結果、A・Cトレンチで縄文時代の良好な遺物包含層を確認できた。これと表面踏査の成果を合わせると、遺跡の範囲は南北約110m×東西80m程と推定される。なおAトレンチで縄文時代の竪穴位跡が1棟部分的ながら検出されている。

遺物は土器、石器合せて整理箱1箱分である。土器は胎土の内容から3類に大別される。

1類土器は胎土に繊維を含まず沈線および刺突文によって文様が構成されるもので、さらに2つに細別される(第3図1~6、図版2)。

A 色調が灰褐色を呈し、比較的太い沈線および刺突文が施されているもの(1~3)。

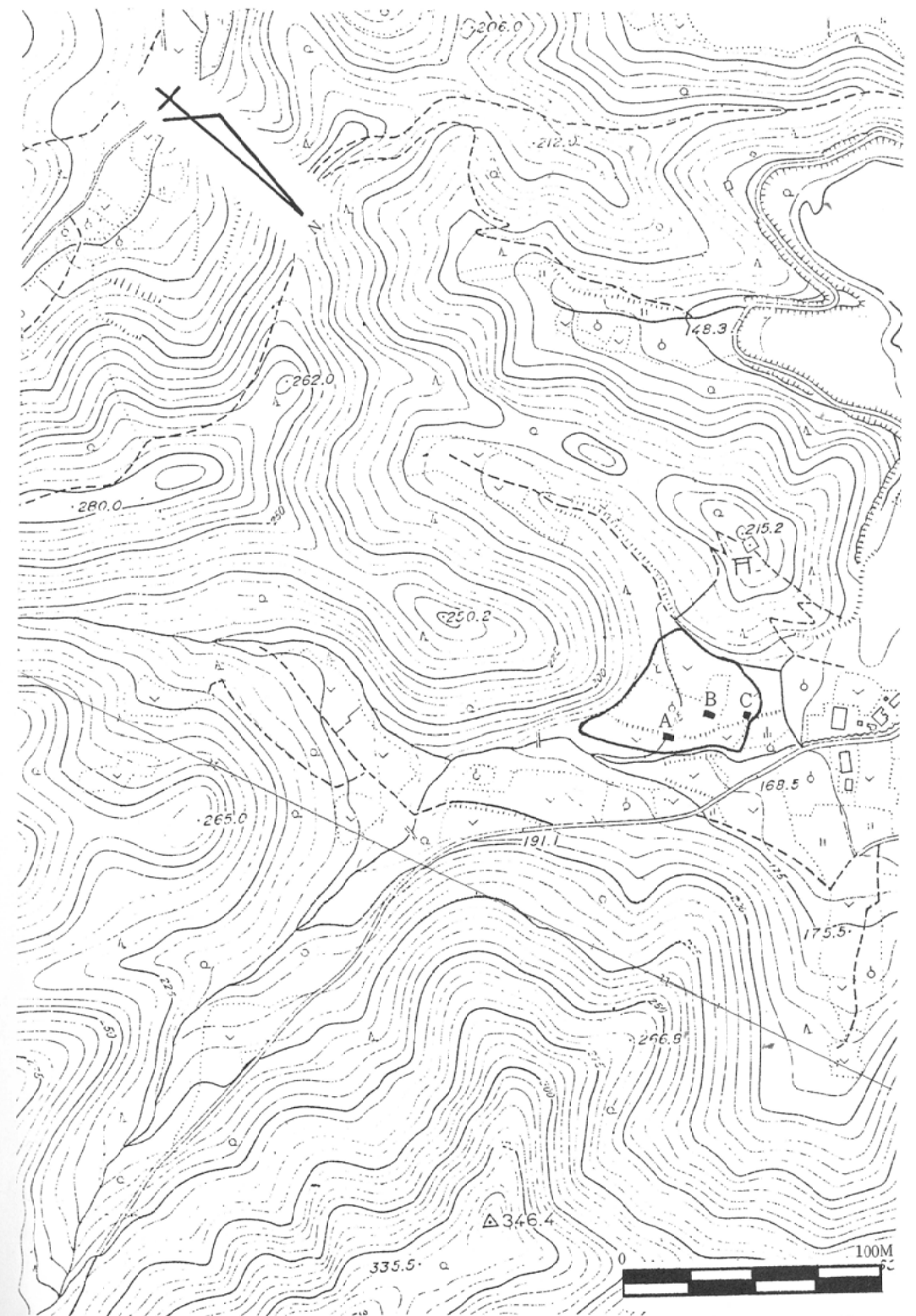
B 色調が茶褐色を呈し、細い沈線による格子目状の文様が施されているものである(4~6)。口唇部が平坦で、体部上半でやや屈折するようである。

2類土器は胎土に繊維を含むもので、施文手法によりさらに5つに細分される(第3図7~35・第4図36~42、図版2・3)

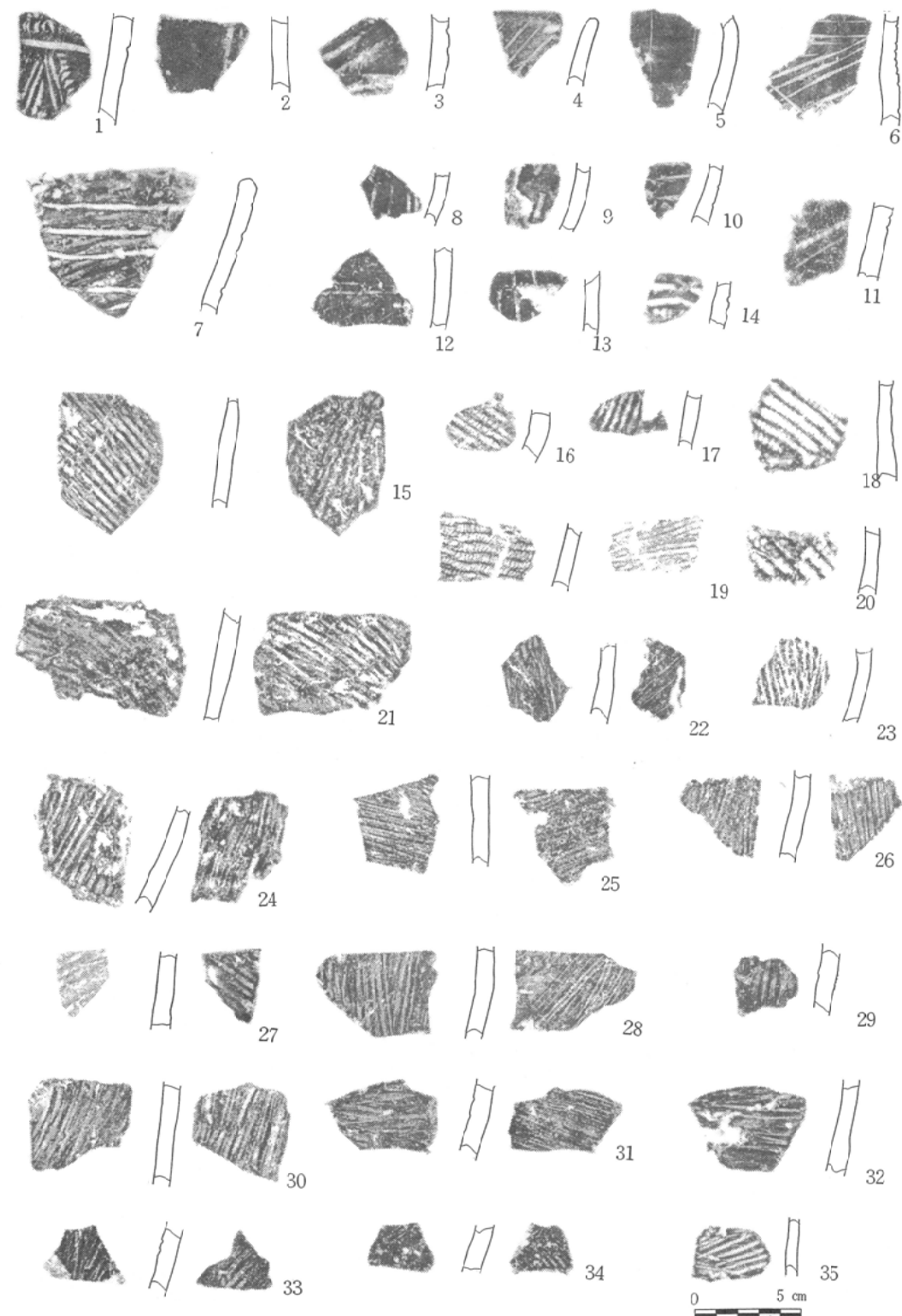
A 幅広く浅い平行沈線によって文様が施されているもので、地文として条痕文(7)ないし縄文(14)を持つものもある。器壁が厚く、裏側は粗く研磨されている。色調は茶褐色を呈し焼成は良くない(7~14)。

B 土器の表面に縄文を有し、繊維を多く含むものである。裏面に条痕文を持つもの(15・19)と、粗くなでられているだけのもの(16~18・20・23)がある。茶褐色を呈する。

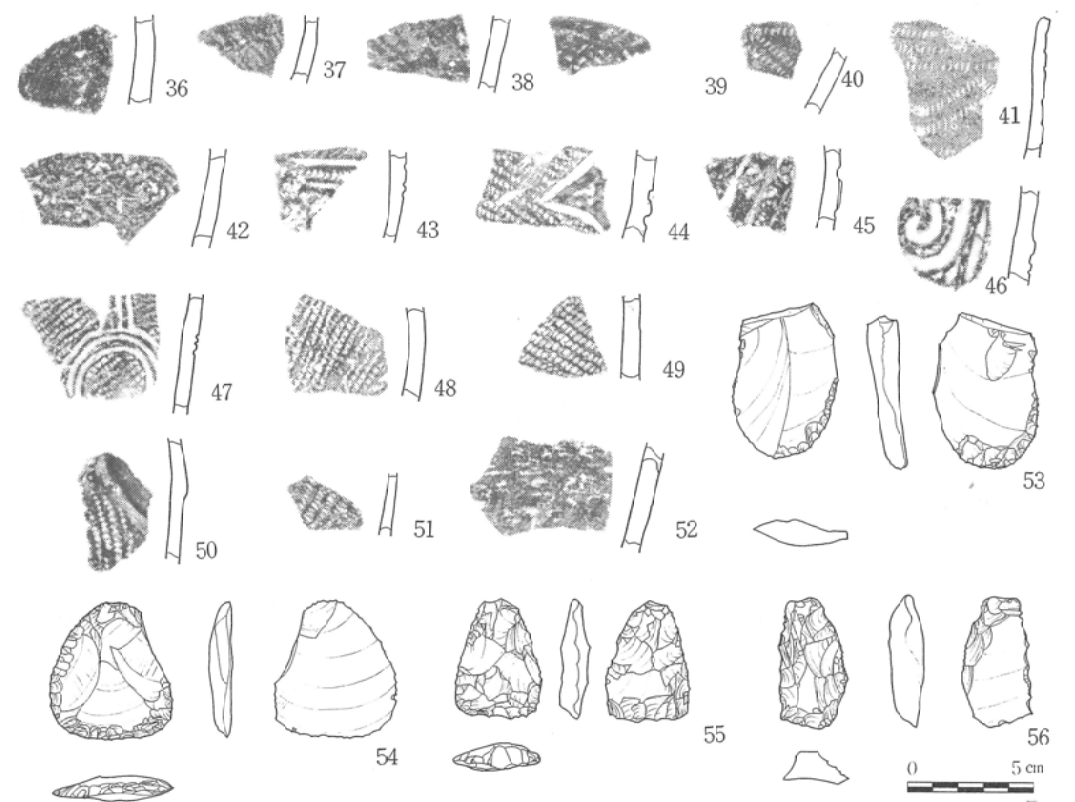
C 表裏ともに条痕文が施され、繊維を多量に含むものである(21・22・24~34)。貝殻の腹縁による条痕が丁寧な施され、色調は暗い灰褐色を呈する。



第2図 にひやく寺遺跡地形図



第3図 にひやく寺遺跡出土遺物(1)



第4図 にひやく寺遺跡出土遺物(2)

- D 表裏とも粗く篋磨きされているもので、繊維の混入度は少ない(36~39)。
- E 貝殻腹縁による押引文が連続して施されるもので、繊維を少量含んでいる(40~42)。
- 3類土器は胎土に繊維を含まず、表面に縄文を地文として有するもので、これに沈線文、刺突文、粘土貼付文などが加わる。本類は4つに細分される(第4図43~52、図版3)。
- A 縄文を地文としその上に平行沈線および「く」状の連続刺突文が施されるもの(43)。
- B 縄文を地文としその上に沈線ないし粘土紐貼付による渦巻文が施されるもの(44~47)。
- C 磨消縄文手法による楕円文を有するもの(50)。
- D 縄文ないし磨消部だけが確認されるもの(48・49・51・52)。
- これらの土器群のうち1A・B類は縄文時代早期中葉に、2A・B類は早期後半の「鶴ヶ島台式」ないし「茅山下層式」、2C類は早期末葉の「茅山上層式」に併行関係を持つものと考えられる。また2E類は前期初頭、3A類は中期初頭、3B類は中期中葉「大木8b式」、3C類は中期後半「大木9式」に併行関係を持つものと考えられる。
- 石器はフレイクも含め10数片ほど出土しているが、楕円形の搔器(53・54)、小形の石篋状のもの(55・56)などがある。

## 2 上原古墳

上原（かみのはら）古墳は、高原町の東南600mに位置する。山形市東部にのびる神室山系の山麓にあたり、三方を山に囲まれた標高152mの北緩傾斜面に立地する(第5図)。昭和29年に山形市の貯水池を設置した際、工事中に石棺が出土したものである。発見地は川の右岸上の原字ダンと称する畑地の表土下1mのところである。同年5月武田好吉氏ら3名が調査をしているので、つぎに報文を引用する(註1)。

『(前略) 調査の結果、石郭の周囲4m並に表土1mの部分は黒色の腐蝕土壤で附近の土質と異なるものがあった。石郭は表土下1mの点にあり、東北より西南に横はり、扁平な自然石を以て周壁を囲み、基の上に数個の自然石を並置して蓋となし、外部より粘土を塗り付けてあった。(後略)』

その後石棺の出土地には貯水池が設置され、現在石棺は貯水池の東北脇に移築されている(第6図)。また貯水池の北方は宅地によって70cm前後削平されている。

試掘調査は、石棺出土地付近の現況図と石棺の実測図作成および地層の確認を目的として、昭和51年10月16・18・19日の3日間にわたって実施した。

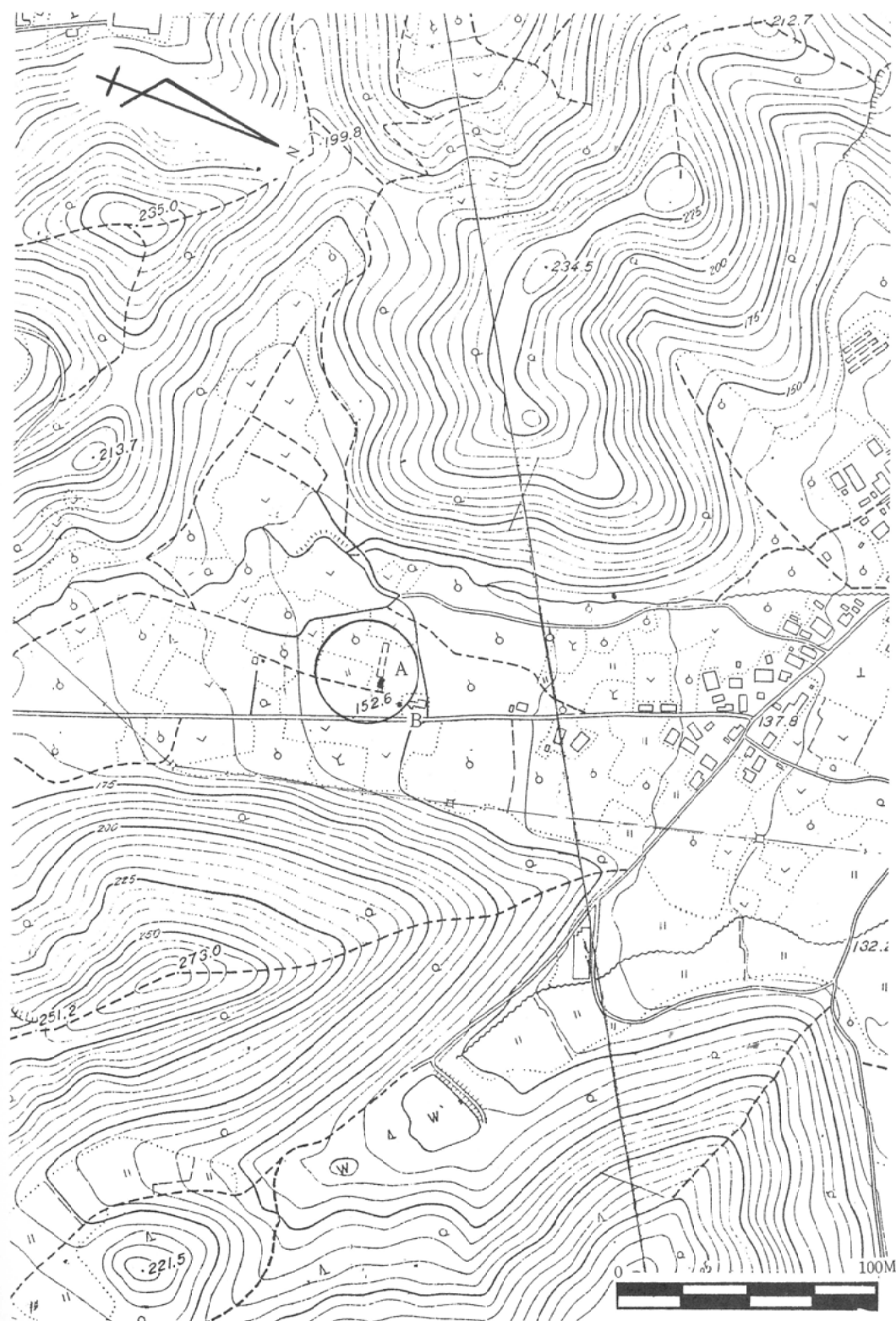
石棺は現形長さ220cm、最大幅70cm、深さ25cmを測る。周壁は長方形の割石を2重に配しその上に扁平な自然石を9枚蓋石として上置している。石棺底面は粘土上に約6cm前後の小石を敷きつめていたという。村山地方に特徴的な竪穴式の組み合せ石棺であり、後述する高原古墳の石棺(第10図)とも類似している。

地層を確認するためのトレンチは、西南に2×4m(Aトレンチ)、北側に1×1m(Bトレンチ)の2本を設定した。両トレンチとも表土下50cmで砂礫層にぶつかり調査が難行したため、発掘面積はAトレンチで2×2m、Bトレンチで1×0.5mにとどまった。両トレンチの基本層序は、I層—表土、II層—黄褐色砂礫、III層—黒褐色砂礫、IV層—褐色砂礫、V層—黄褐色砂礫となっている(第7図)。このうちI・II層は貯水池の工事による二次堆積土、III層が旧表土と推定される。今回の試掘では古墳造成の際の明瞭な墳丘盛土や周溝は検出されなかったが、Bトレンチの旧表土下に検出された薄い黒褐色砂礫層は版築の一部とも考えられ、今後さらにこの地区の調査を必要とする。

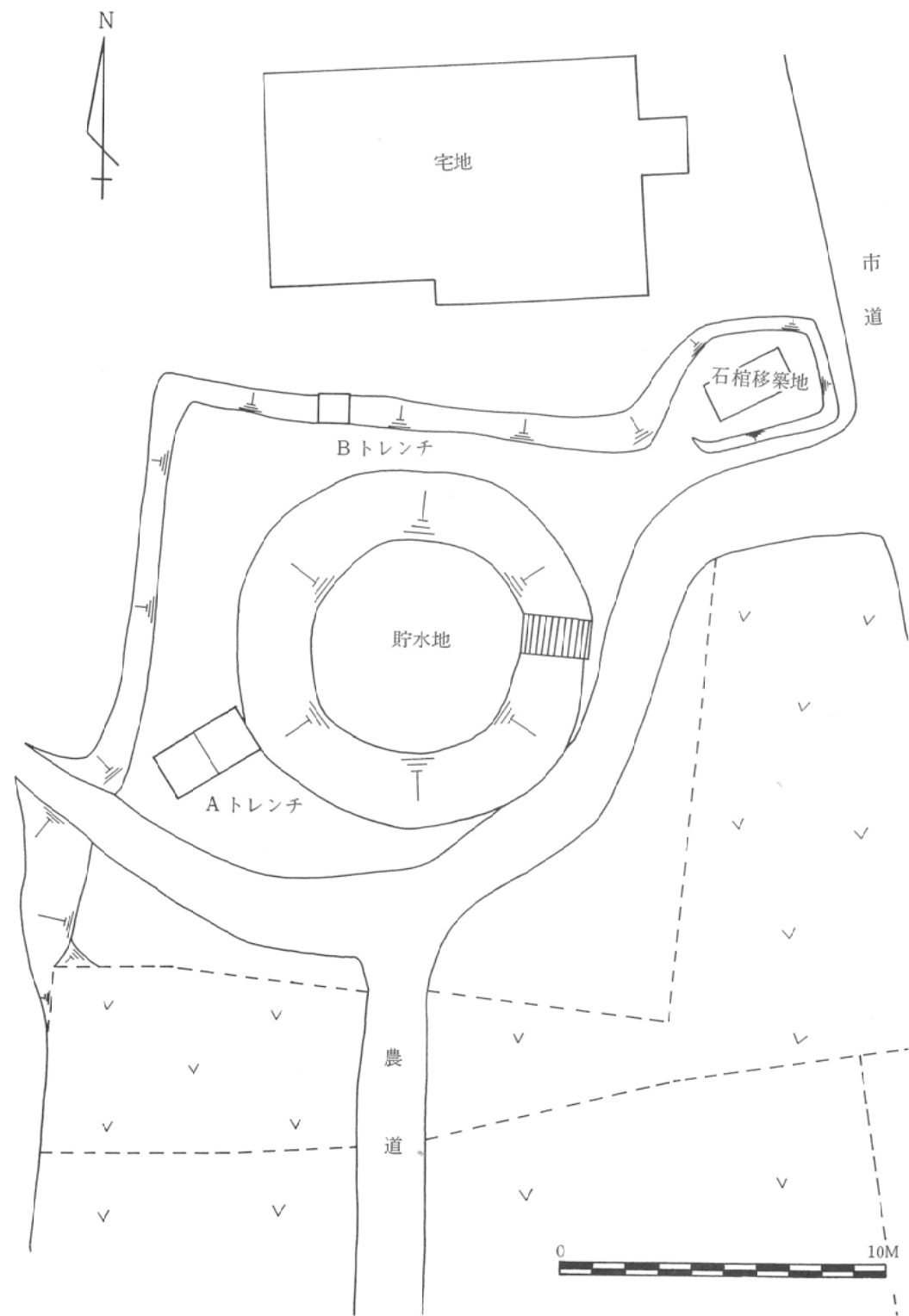
トレンチ内からは時期を決定する土器などは出土しなかったが、高原古墳の石棺は6世紀代とも考えられており(註2)、上原古墳も奈良時代以前に溯らせることが可能である。

(註1) 武田好吉「高原の第二古墳調査」羽陽文化23 1954

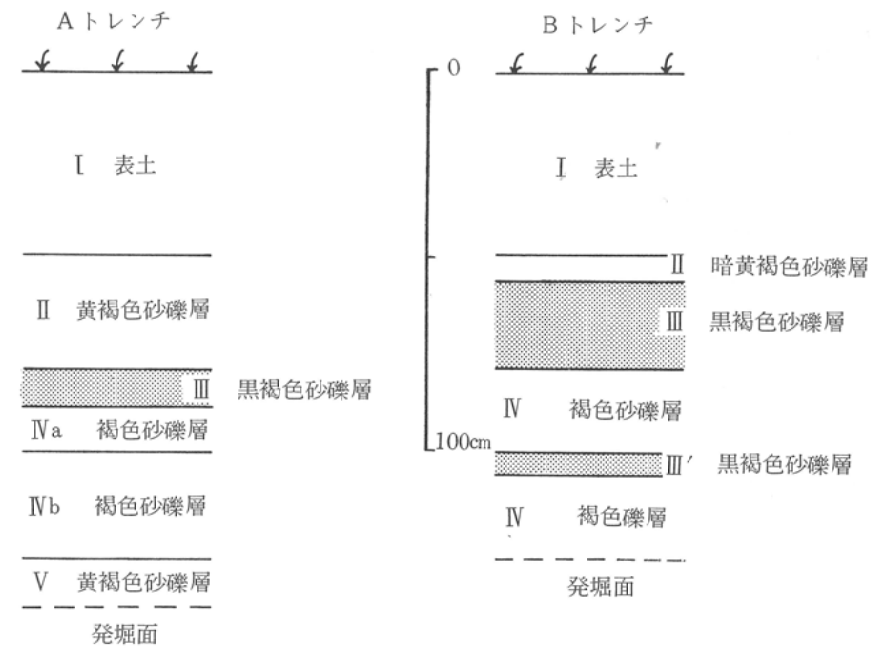
(註2) 加藤 稔「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化所収』1973



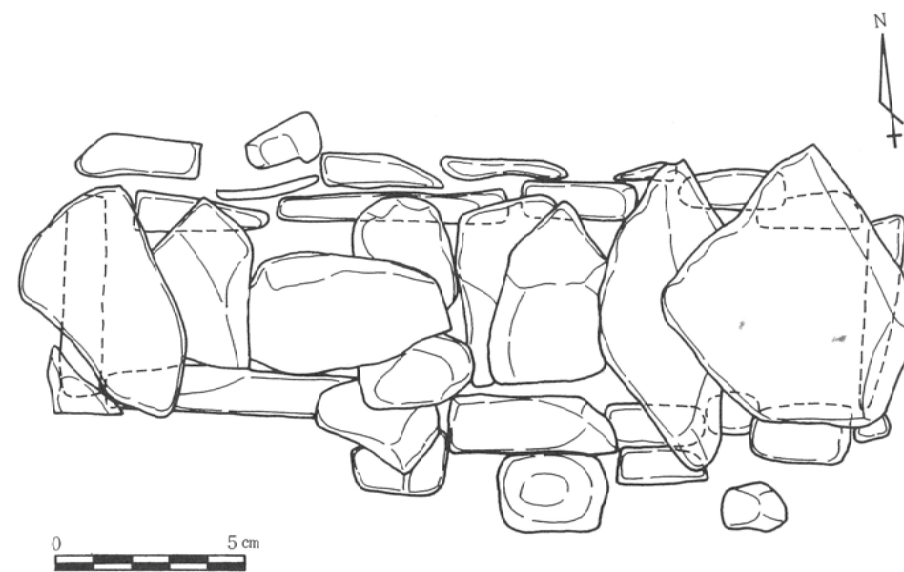
第5図 上原古墳地形図



第6図 上原古墳現状図



第7図 上原古墳土層柱状図



第8図 上原古墳石棺実測図

### 3 高原古墳 (9・10図 図版6)

高原古墳は高原町の北方150m、青野部落との間に突き出た「小山」と呼ぶ小丘陵の西斜面にある。小山はもと高さ6~7m、長径約40mの瓢形をなしていたが、現在土採りによって丘陵の南半は失われている。後述する石棺の出土地域は、昭和27年山形県指定史跡として買収されている。本古墳付近の高みの山林中にはこのほか4基の古墳があり、これらを総称して高原古墳群ともいう。その場合本古墳は他と区別して高原1号墳となる。

今回高原墳の試掘調査は行っていないが、遺跡の重要性から一項を設けて報告する。高原古墳については、すでに柏倉亮吉(註1)、川崎利夫(註2)が報告をしているのでここではそれら報文を引用して述べる。

昭和24年、土地所有者が山林と畑との境に渠溝を掘ったところ石棺につき当たった。発見当時は、杉林の中に厚さ70~90cmの封土があり、その中に埋もれて、石英安山岩の自然石6枚を蓋石とする石棺があったという。その内部には土砂が充満し、樹木の根も侵入して、少しく石棺の構造を破壊していた。

石棺の形は長い短形で組合式箱形というべく、その長軸を北北東から南南西に向けていた(N-9°-E)。大きさは長辺256cm、幅70cm、深さ40cmで、この種では例のない大きさである。棺内の底面は、平たい小石を3cmの厚さに敷きつめ、粘土をもって目張りする。小石層と粘土層とで4.5cmの厚さに達し、防水に役立つようにしている。

蓋石としては、高さの不均等な石6個が、石の棺の上のせられている。蓋石間の間隔はかなり大きい、粘土を用いてこの間隔を塞いだものであろう。

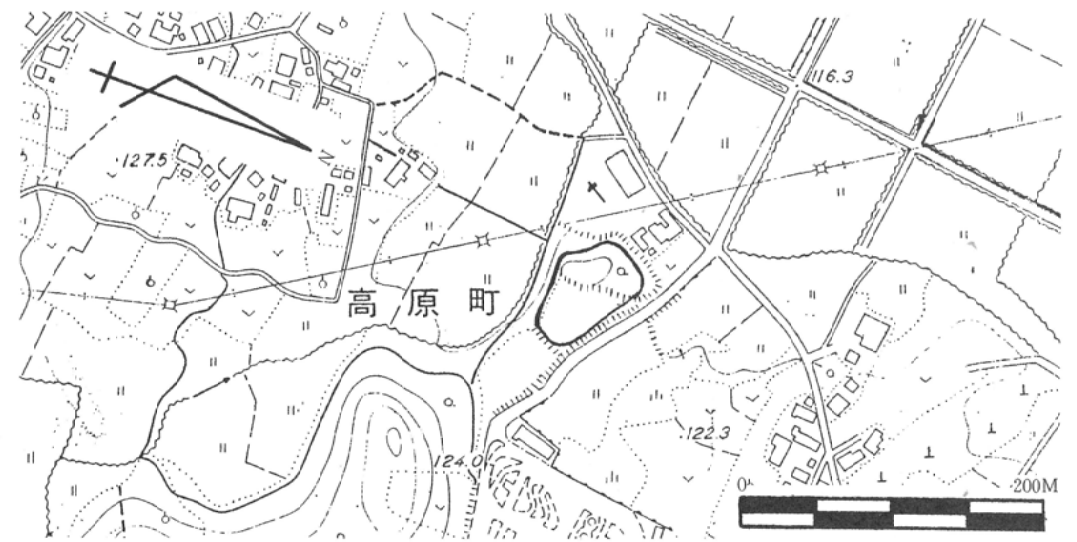
(柏倉亮吉『山形県の古墳』)

高原古墳の石棺は、堅穴式で規模が大きいことなどにより、時期的には古墳時代中期の終りないし後期初頭頃に位置するものと推定されている(註3)。年代的には6世期代に位置する。

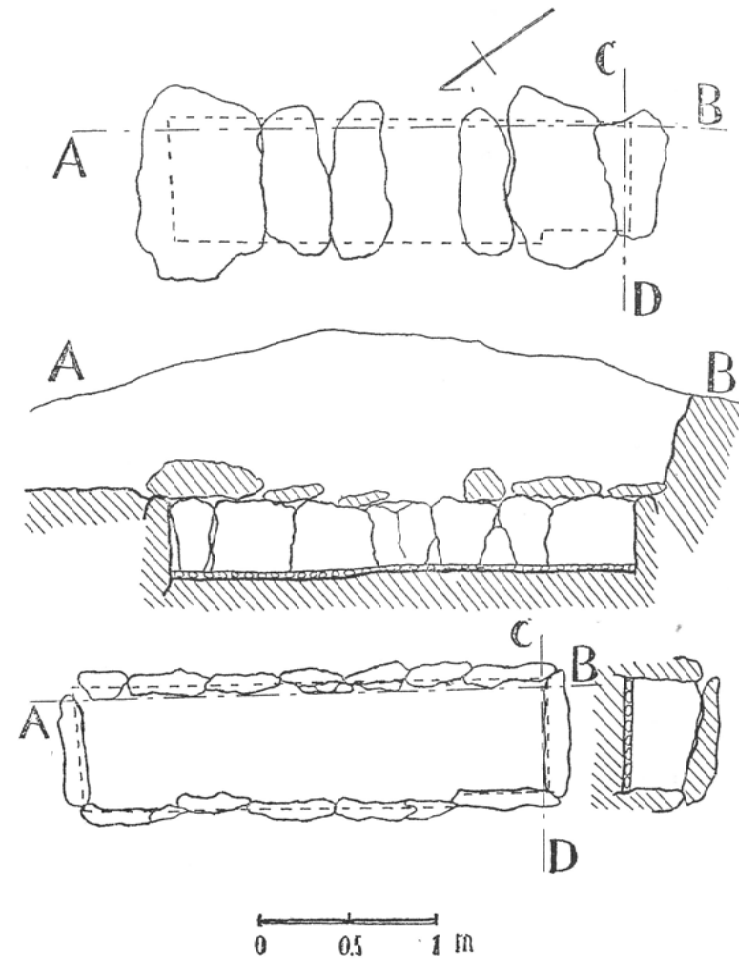
(註1) 柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告書第4輯 1953

(註2) 川崎利夫「古墳の出現」『山形市史』上巻所収 1973

(註3) 加藤 稔「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化』所収 1973



第9図 高原古墳地形図



第10図 高原古墳石棺実測図

#### 4 御花山古墳群（第11図・図版6）

御花山古墳群は、山形市青野部落の北方500mに位置する。神室山系より延びた小丘陵の一つ「御花山」の山頂近くに三嶋神社の小祠があり、ここから西北方にかけての斜面に立地する。御花山は標高155mで、大きさは南北約480m、東西230mを測る。地目は以前は松が繁茂していたが、現在は開墾されて全面ブドウ等の果樹園になっている。

ここに古墳が注目され始めたのは、大正4年に山頂近くを粘土採集の目的で掘り下げたところ、土器類を発見したことによる。当時史蹟調査委員の五十嵐清蔵氏の作った見取図によると延々39基の墳丘を記入している。現在はこのうち「狐穴」等若干の所在を確認するのみである。今回の分布調査では草木が著しく古墳の実数は確認できなかった。いづれ試掘調査を実施してこの欠を補いたい。本古墳群については柏倉亮吉氏の報文（註1）があるのでつぎにこれを引用して述べる。

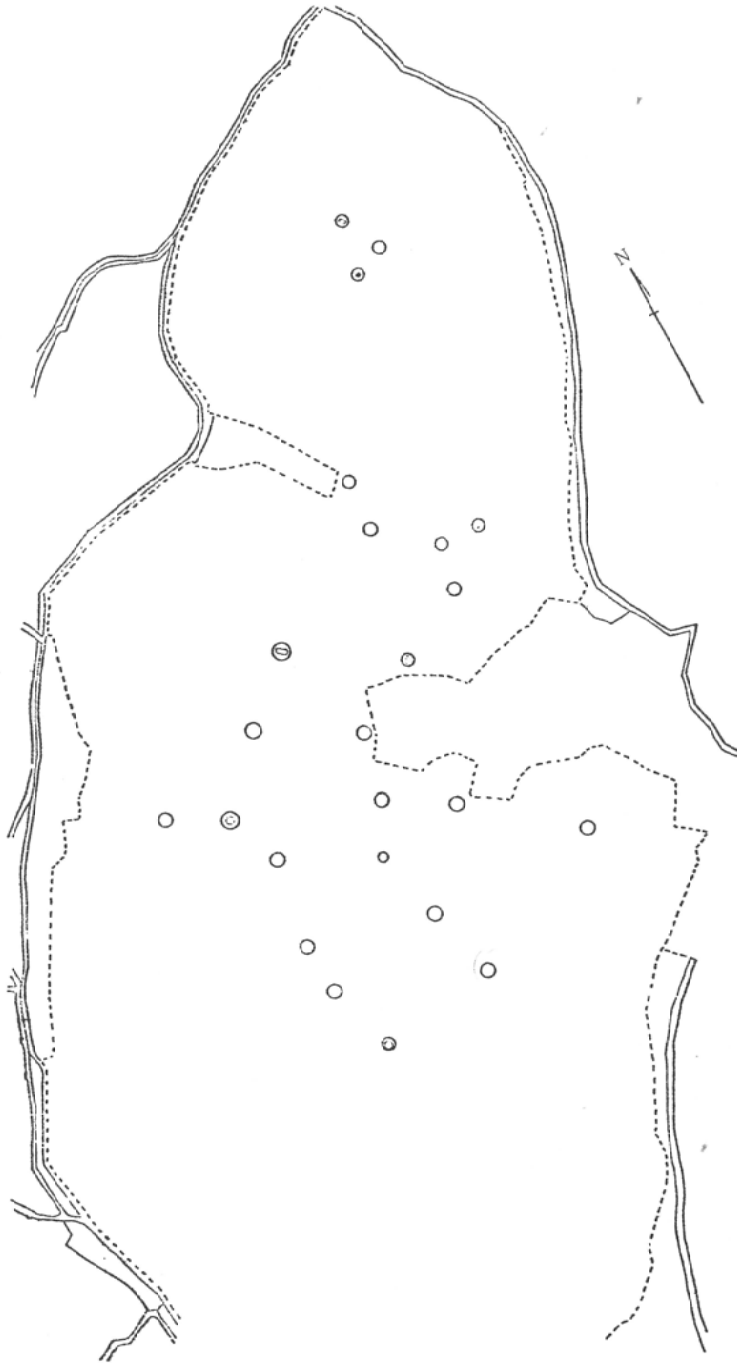
大正4年に五十嵐委員等が発掘調査を実施したのはこの内の中央部（狐穴より上方）の5基であつたと伝える。その内石棺を出したのはやや東に寄つたもので石棺の状況はほぼ南北に長い箱式石棺であつた。その側壁は自然の板石を用い、長さ1.5m弱、幅36～42cmという小形のもので、その上に何枚かの板石を被つていたという。これより西方にあつたもので石棺のない墳丘からは環形の須恵器が出土したようである。その後昭和10年頃になつて土地所有者が前記石棺発見の古墳の東方地点で土採り作業中、また石棺を発見したことがある。棺中に東方に頭を置いた人骨があり、他の副葬品は見当らなかつたという。昭和8年になってまた一つの石棺が開墾の際発見掘され、棺中に人骨・歯を存していたという。さらにまた年代不詳だが土地所有者が一石棺を掘り当てている。これらの諸報告によると、本古墳群は古い時代から次々に発掘され、あるいは石棺を、あるいは土器片を、あるいは人骨を出すなどの様々な様相を呈していたのであつた。

昭和25年調査の際には、既に農地開放後で、各自開拓を進めた後であり、表土は均され封土の分明なるものは極めて少なくなつていたのである。その総数は23基である（第11図）封土に大小があつて一概にはいえないけれども、直径で小は9.6m程度から大は25.7m程に達した。（柏倉亮吉『山形県の古墳』）

御花山古墳群から出土した土器には、土師器甕・須恵器杯・蓋・陶磁器などがある。すべてが一基の古墳からのものではないにしても、土師器は東北南半の「栗圀式」、須恵器は穀塚古墳期、陶器は奈良時代のものである。御花山古墳群の一部は7世紀代の築成を考えることができる。（註2）

（註1） 柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告書第4輯 1953

（註2） 加藤 稔「最上川流域における古墳文化の展開」『最上川流域の歴史と文化所収』1973



(縮尺約 3 千分の 1)

第11図 御花山古墳群分布図

## 5 塚田A・C遺跡（第12図、図版7・8）

塚田A・C遺跡は、山形市見崎部落の東方に位置する。最上川支流の白川が馬見ヶ崎川となって蛇行する兩岸の自然堤防上には良好な小台地が形成され、遺跡が多く立地する。左岸の塚田地区もその一つで、今回の分布調査で塚田A・B・Cの3遺跡が確認されている。このうち横断自動車道の県試案ルート付近にあたる塚田A・C両遺跡について、昭和51年10月19～22日の3日間試掘調査を実施した。

塚田A遺跡は、馬見ヶ崎川の自然堤防上に細長く立地し、東側を一段低く小河川が流れている。標高は約103mを測り、地目は現在水田および野菜畑になっている。畑の表面からは土器を少量採集できるが、昭和36年の暗渠工事の際は遺跡の南地区より多量の土師器・須恵器・焼土などが発見されたという。

試掘調査は遺跡の北側荒地に1×2mのトレンチを2本設定した。南側をAトレンチ、北側をBトレンチと呼ぶ。試掘の結果、両トレンチとも表土下約50cmで黄褐色砂層に達し、層序はⅠ層が耕作土、Ⅱ層が暗褐色砂質土、Ⅲ層が明褐色砂質土、Ⅳ層が黄褐色砂である。遺物はⅡ層上部から土師器片が微量出土しただけである。なおBトレンチ中央で多量の炭化物を含む落ち込みを1個検出した。土壌ないし住居跡の可能性を持つが、詳細は不明である。

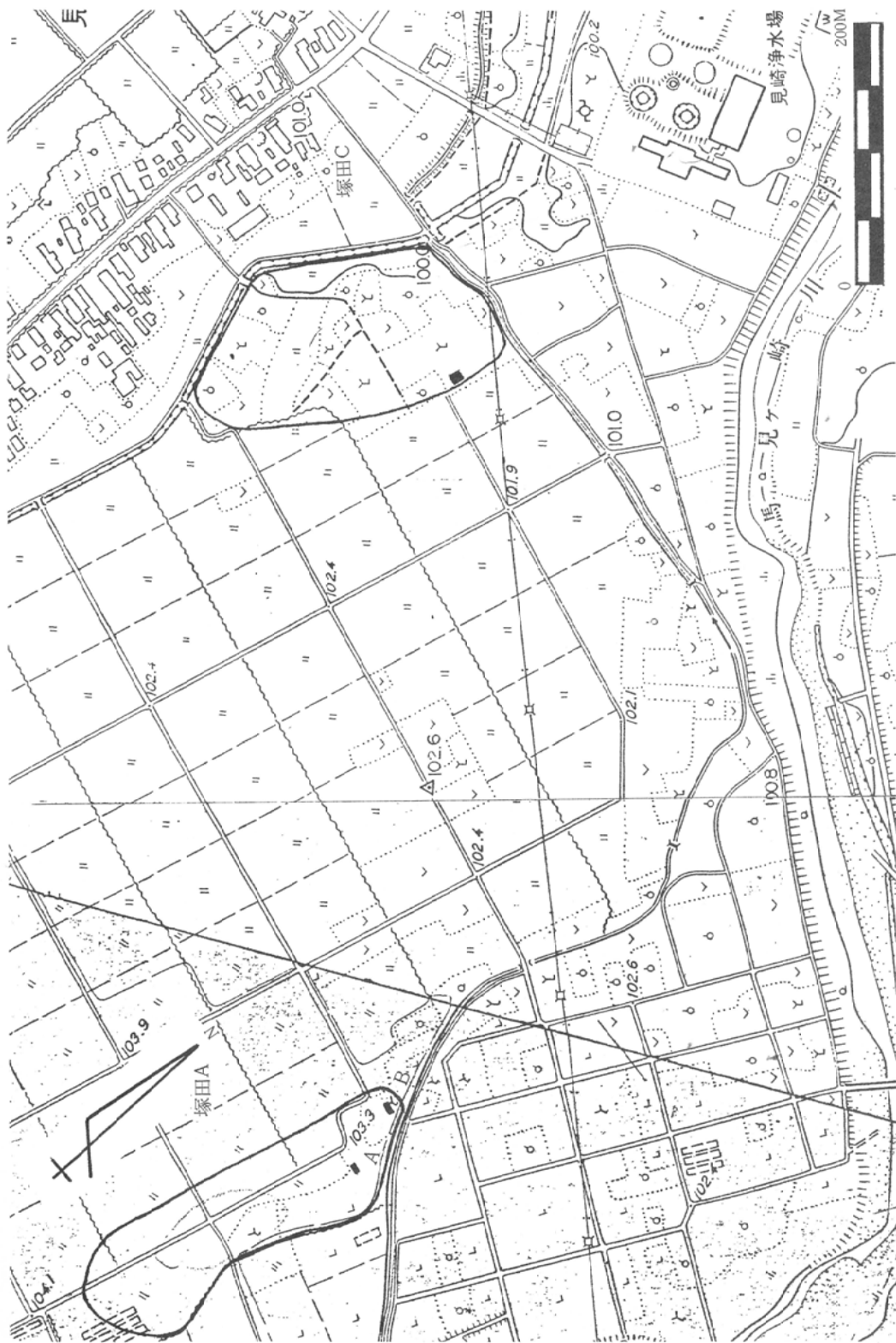
塚田C遺跡は、見崎部落のすぐ東で見崎浄水場の南側に位置する。馬見ヶ崎川の旧氾濫原に残った小台地で、周囲の水段よりは一段高くなっている。標高は約100mを測り、地目は現在桑畑および果樹園となっている。遺物はこの小台地の全面から表面採集できるが、とくに東側に多いようである。

試掘調査は遺跡の東端に4×4mのトレンチを1本設定した。層序はⅠ層が耕作土、Ⅱ層が暗褐色砂質土、Ⅲ層が明褐色砂質土、Ⅳ層が黄褐色砂である。Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層で、表土下約60cmでⅣ層の無遺物層に達する。遺構は今回検出できなかった。

遺物はⅡ層上部から土師器・須恵器および陶磁器片が出土し、Ⅲ層からは土師器・須恵器が出土した。土師器には罎・甕などの器形があり、内面黒色処理を施したロクロ土師罎が特徴的である。須恵器には罎・甕などの器形があり、回転糸切りの底部をもつ罎がある。陶磁器には天目、皿などの器形があり、青磁片も1点発見された。

塚田A・C遺跡の時期は、出土遺物から平安時代後半頃と堆定されるが、陶磁器からみて一部鎌倉時代まで下る可能性を持つ。





第12図 塚田塚田A 塚田C 遺跡地形図

## 6 物見台遺跡 (第13~15図、図版9~11)

物見台遺跡は、中山町三軒屋部落の西方200mに位置する。最上川右岸の旧氾濫原上に立地し、遺跡付近は周囲の水田面より一段高い小台地となっている。現在地目は果樹園が主体で一部桑畑および野菜畑である(第13図)。

昭和36年に柏倉亮吉氏らによって発掘調査が行なわれ、土師器「住社式」併行期の良好な遺物が出土し、「三軒屋式」として山形県のこの時期の型式指標となっている(註1)。発掘地点は、第13図の送電線用鉄塔の付近である。所在地が中山町大字三軒屋字物見台となっており、小字三軒屋地内にはもう一つ別の遺跡が存在するので、後者を新しい三軒屋遺跡、本遺跡を物見台遺跡と呼ぶことにする。

分布調査段階ではこの小台地の畑全面に遺物が散布し、その範囲は東西200m×南北120mにおよぶ。試掘調査は本遺跡の西側リング畑の下に、南北4m×東西2mのトレンチを設定した。期間は昭和51年10月19日から同22日までの4日間である。

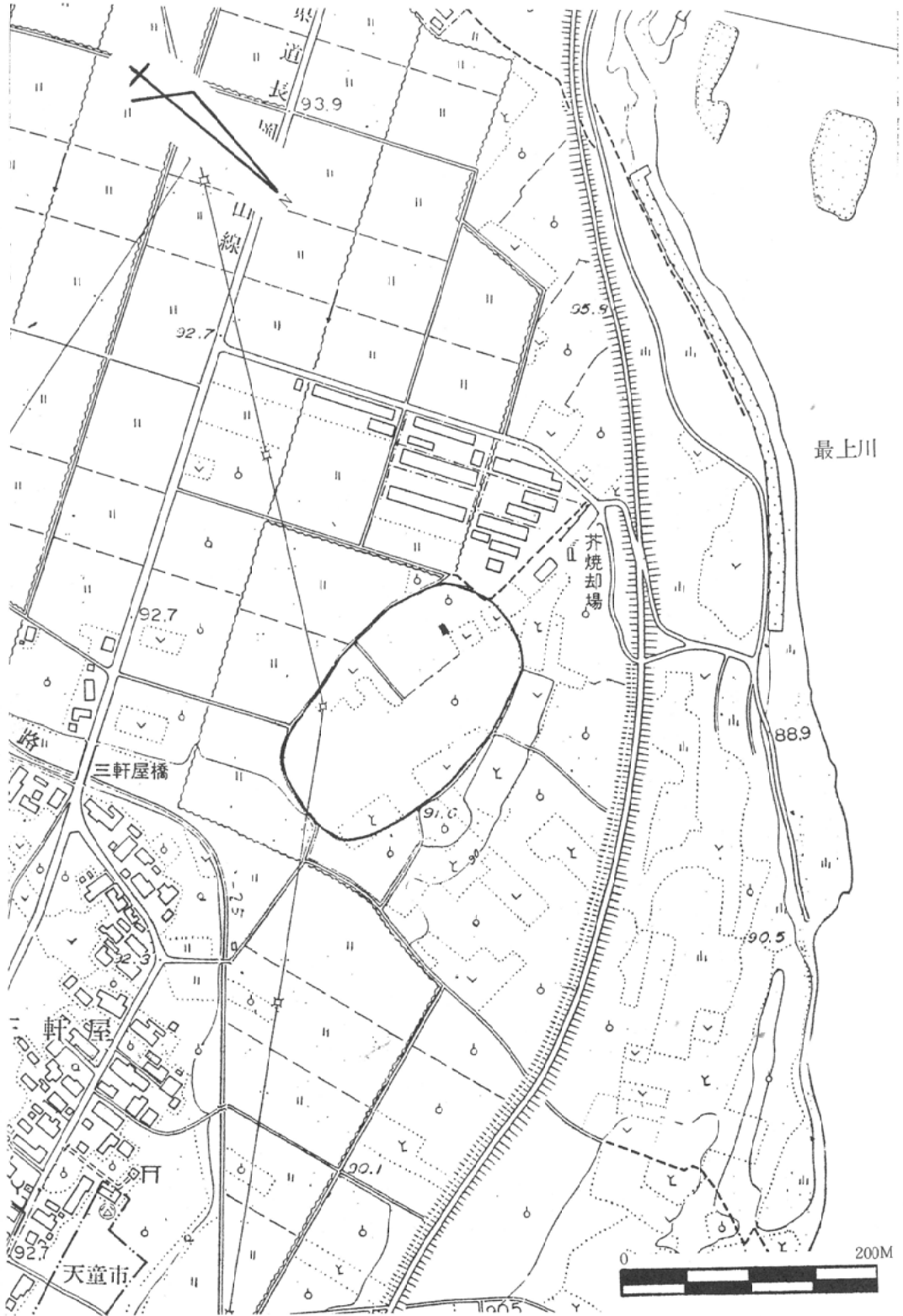
調査の結果、表土下約60cmの深さでトレンチ内全域にわたって竪穴式住居跡が1棟検出された。層序はI層一耕土、Ia層一黒褐色混合層、II層一黒褐色砂質土、III層一褐色砂質土、I層一黒色砂質土、覆土2層一暗褐色砂質土である(第14図)。II層以下が遺物包含層でIII層が無遺物層、遺構はIII層を掘り込んで作られている。

住居跡は北壁と東壁の一部が検出されている(ST1)。現在の壁高は約15cmを測り、平面プランはほぼ方形を示すものと推定される。住居内に5個のピットないし落ち込みが検出されている。床面は褐色砂をやや固く叩きしめている(第14図)

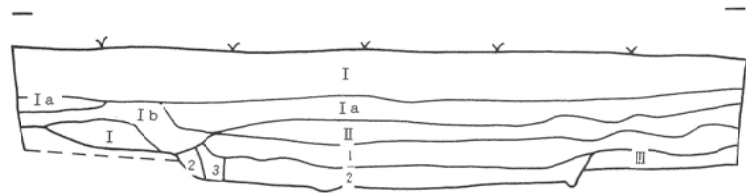
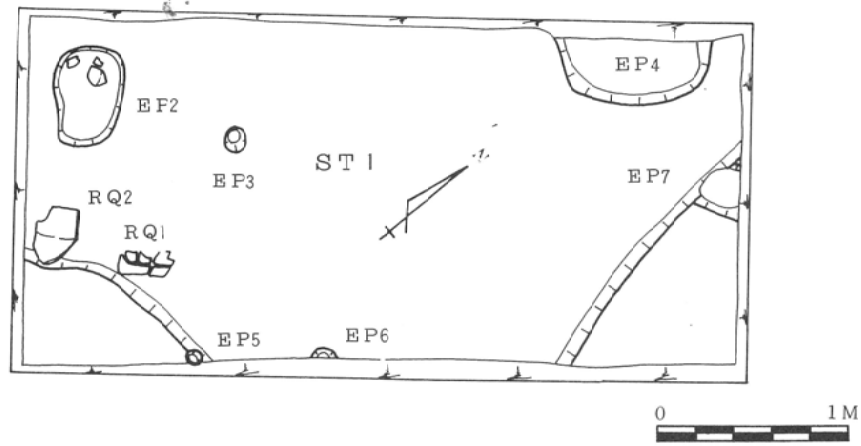
ST1覆土内から出土した土器は、全部で約550片を数える。土師器の坏および甕形土器がほとんどで、須恵器は坏および甕形土器各1片ずつである。土師器坏形土器は、内面黒色処理されているものが大半を占め、体部中位に段を有する。外面が丹塗されているものもある。甕形土器は、口縁部が「く」の字形に外反し、体部中程に最大幅を有するものである。外面に刷毛目調整が施され、内面に一部刷毛目調整を有するものもある。ST1南半において甕形土器片が2個所にまとまって発見された(第15図)。須恵器は、ロクロ整形のある坏形土器口縁片と内外に叩き目を有する甕形土器片が各1片ずつ発見された。

これらの土器のうち土師器は、東西南半の「住社式」に併行するものと考えられ、時期的には7世紀中頃に当たる。遺物の散布状況からして、物見台遺跡の所在する小台地には全面に遺構の存在が推定される。

(註1) 柏倉亮吉他「鳴遺跡」『山形史』別巻1 1968

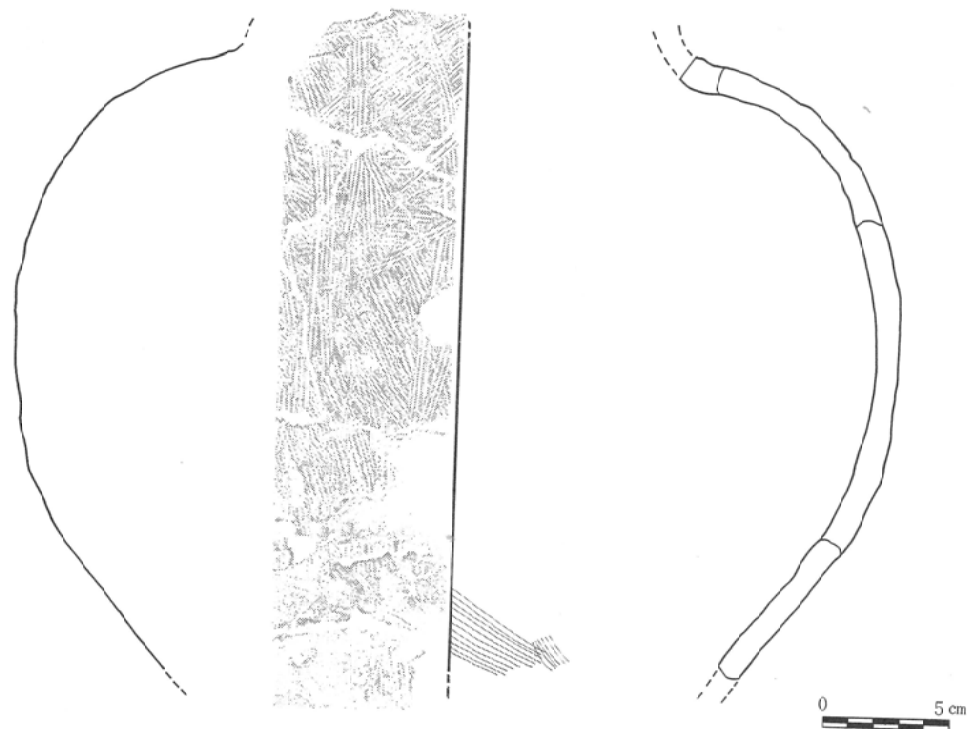


第13図 物見台遺跡地形図



第14図 物見台遺跡A トレンチ平面図

- |     |            |    |        |
|-----|------------|----|--------|
| I   | 褐色砂質土 (耕土) | 1層 | 暗褐色砂質土 |
| Ia層 | IとIIの混合土   | 2層 | 暗褐色砂質土 |
| Ib層 | 明褐色砂土      | 3層 | 攪乱土    |
| II層 | 黒褐色砂質土     |    |        |



第15図 物見台遺跡出土土器

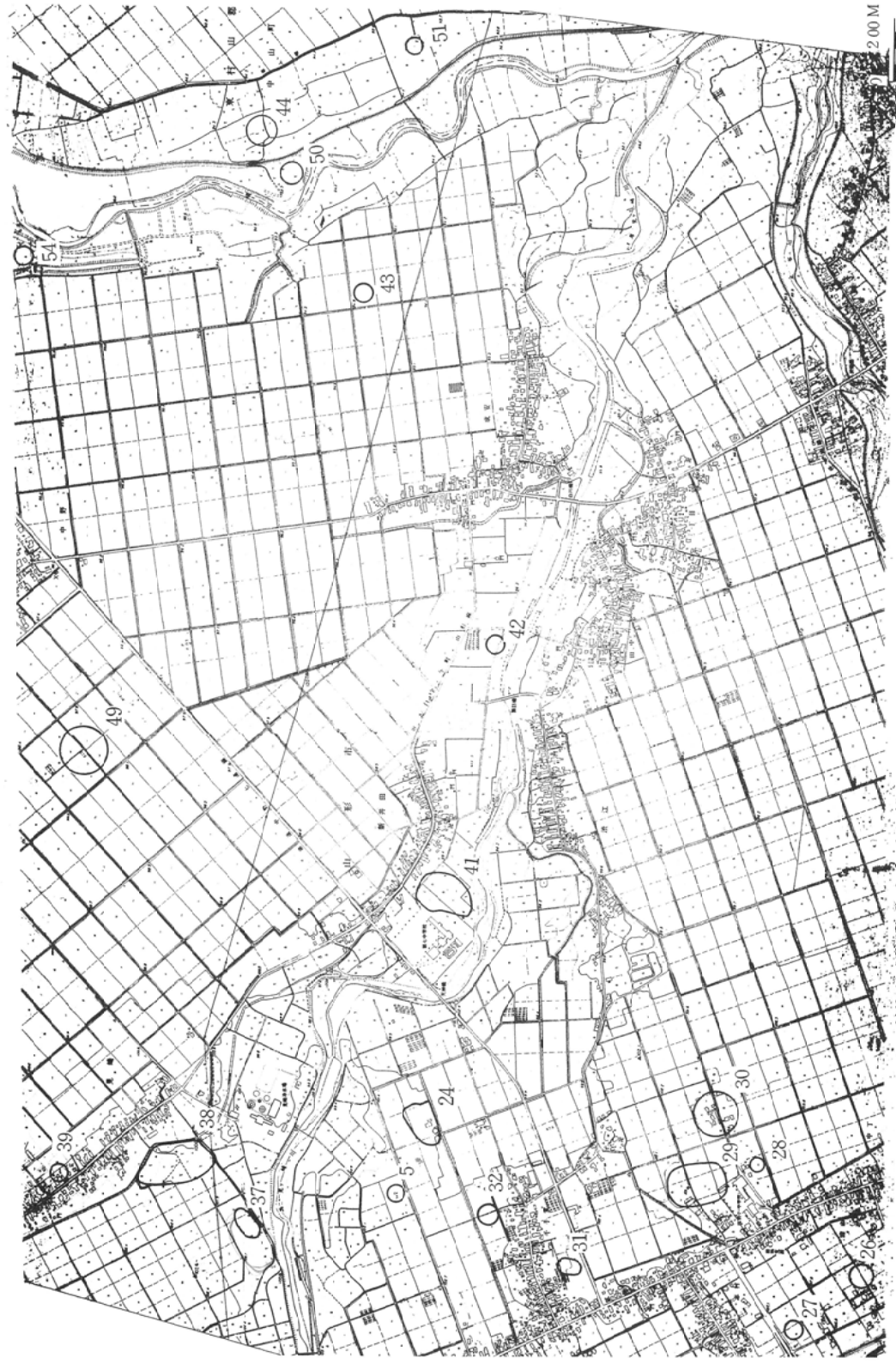
## IV 東北横断道関係遺跡分布図



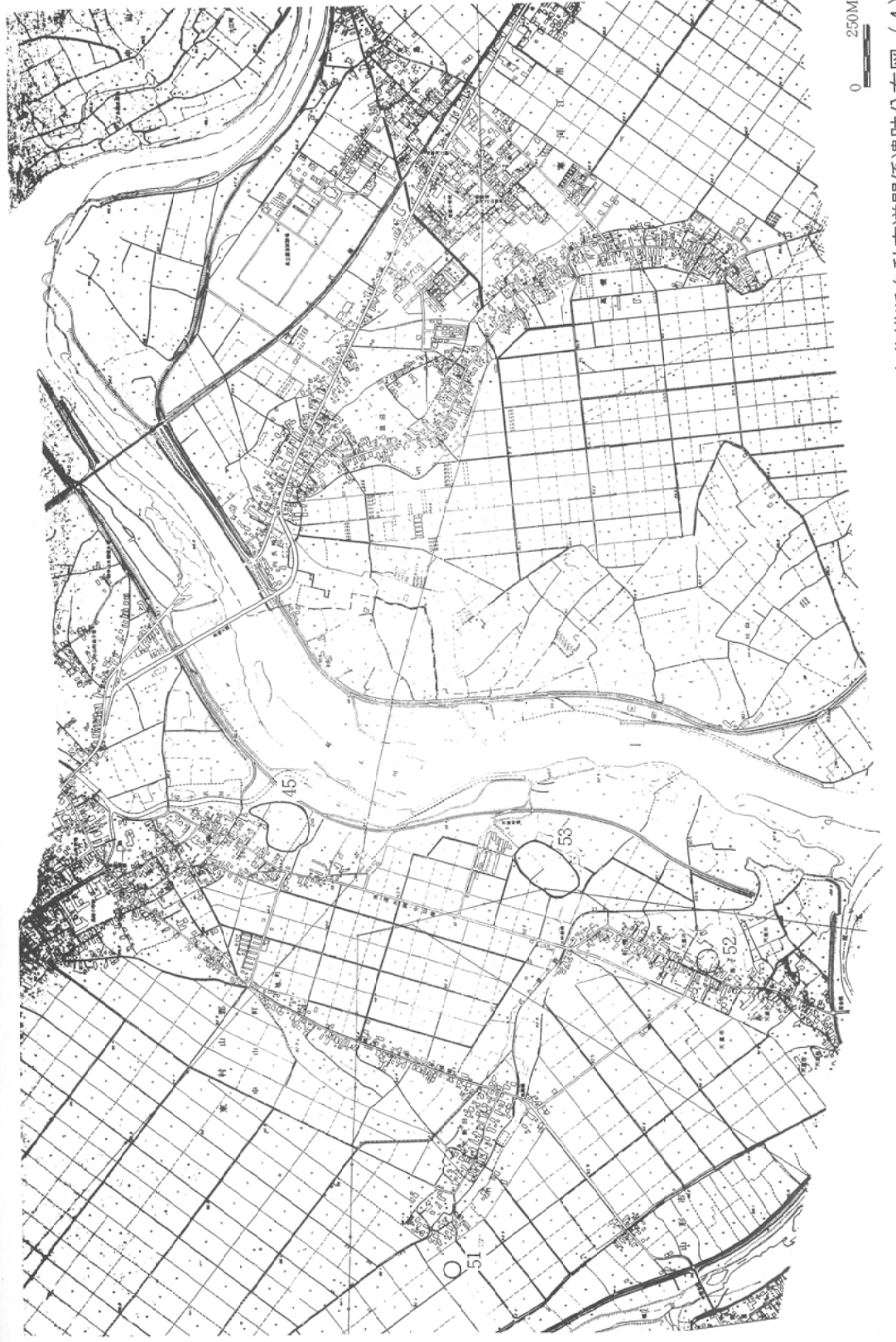
第16図 東北横断自動車道関係遺跡分布図 (1)



第17図 東北横断自動車道関係遺跡分布図 (2)



第18図 東北横断自動車道関係遺跡分布図(3)

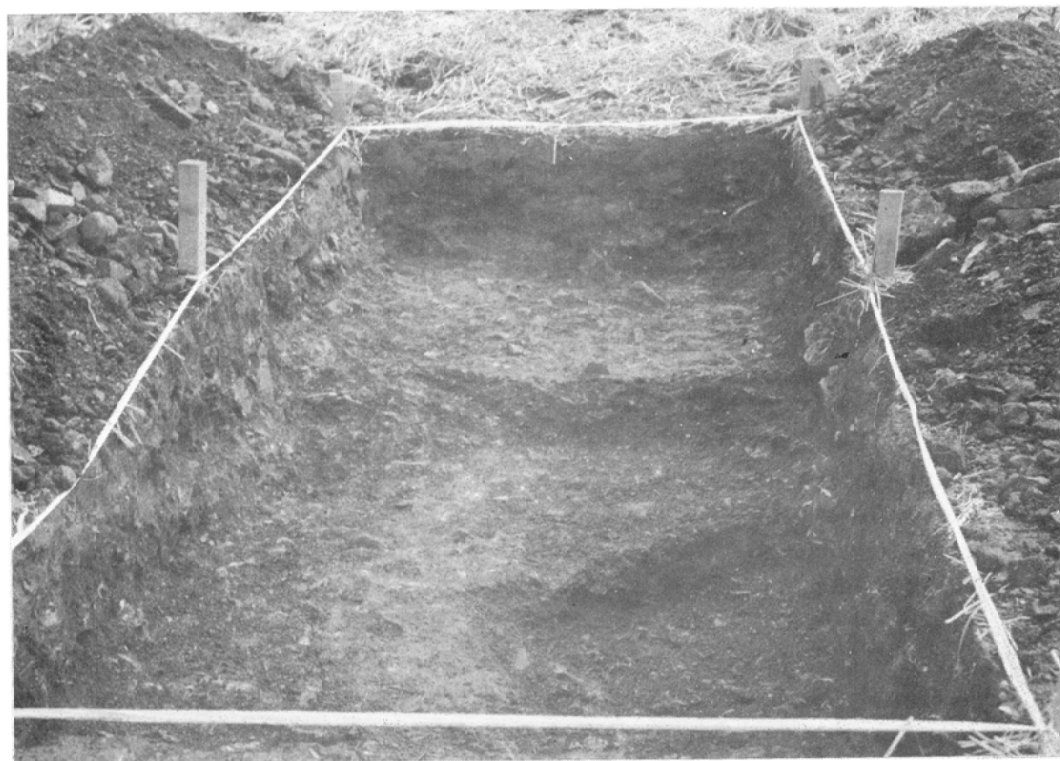


第19図 東北横断自動車道関係遺跡分布図(4)

版 圖

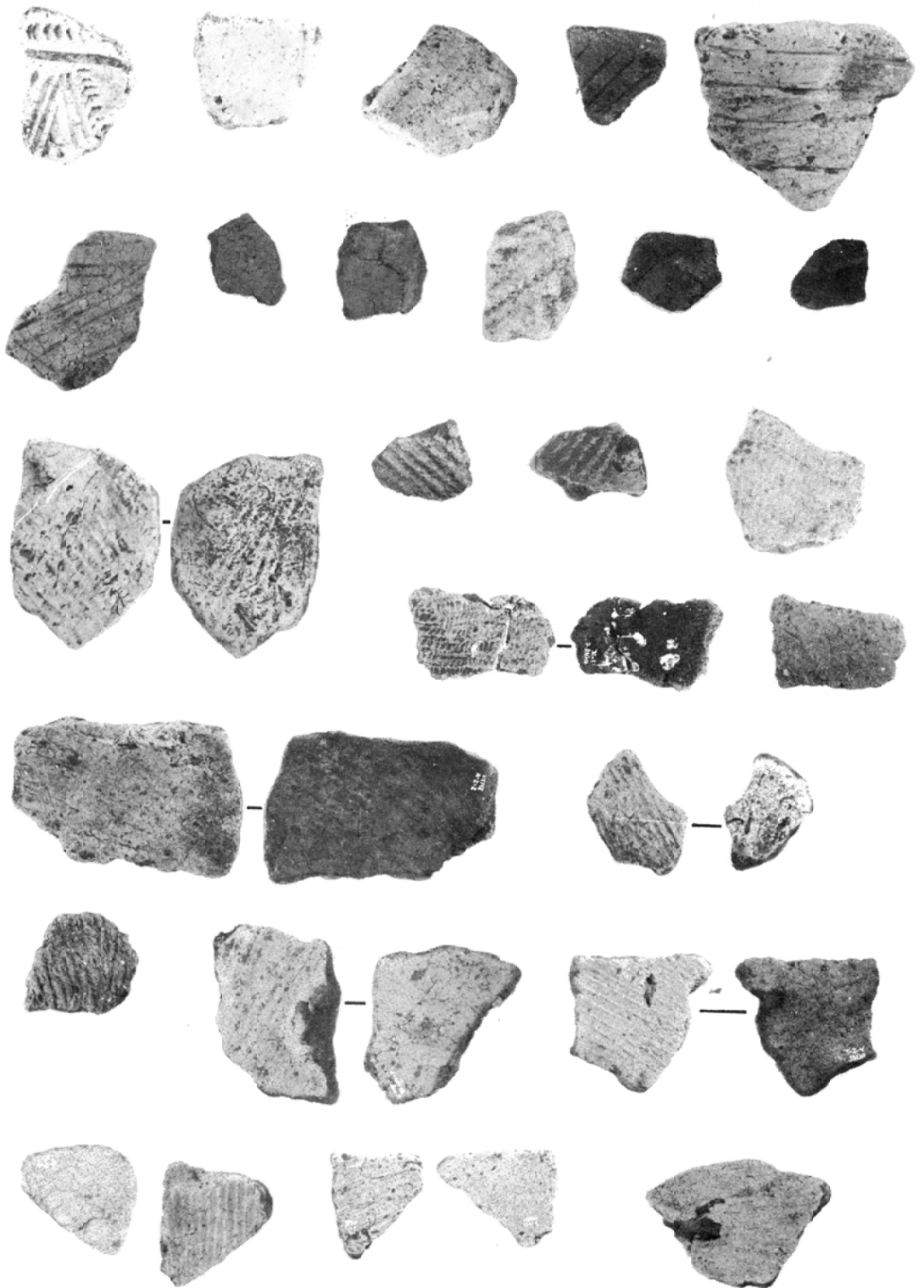


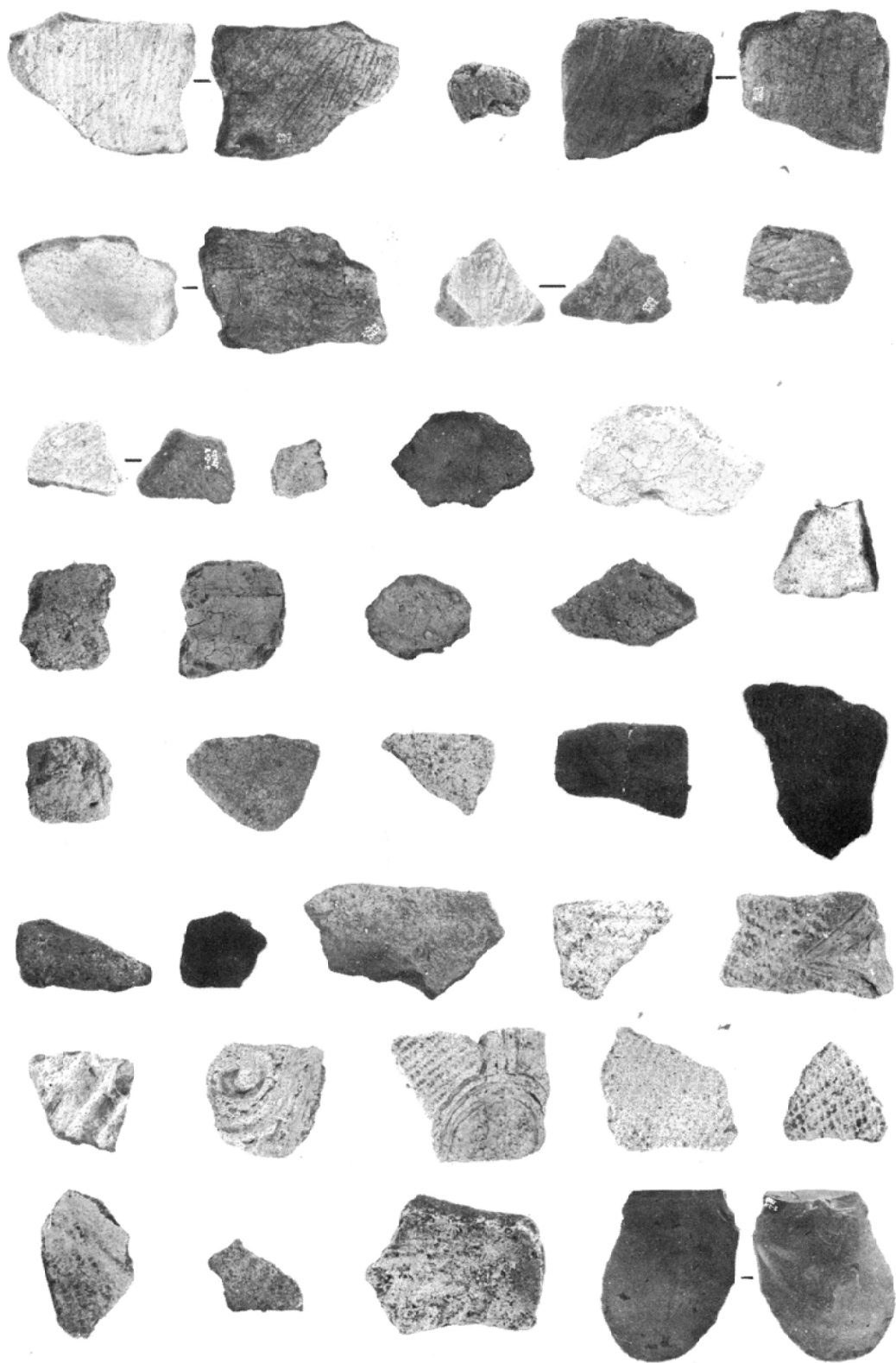
にひやく寺遺跡近景



にひやく寺遺跡A トレンチ状況







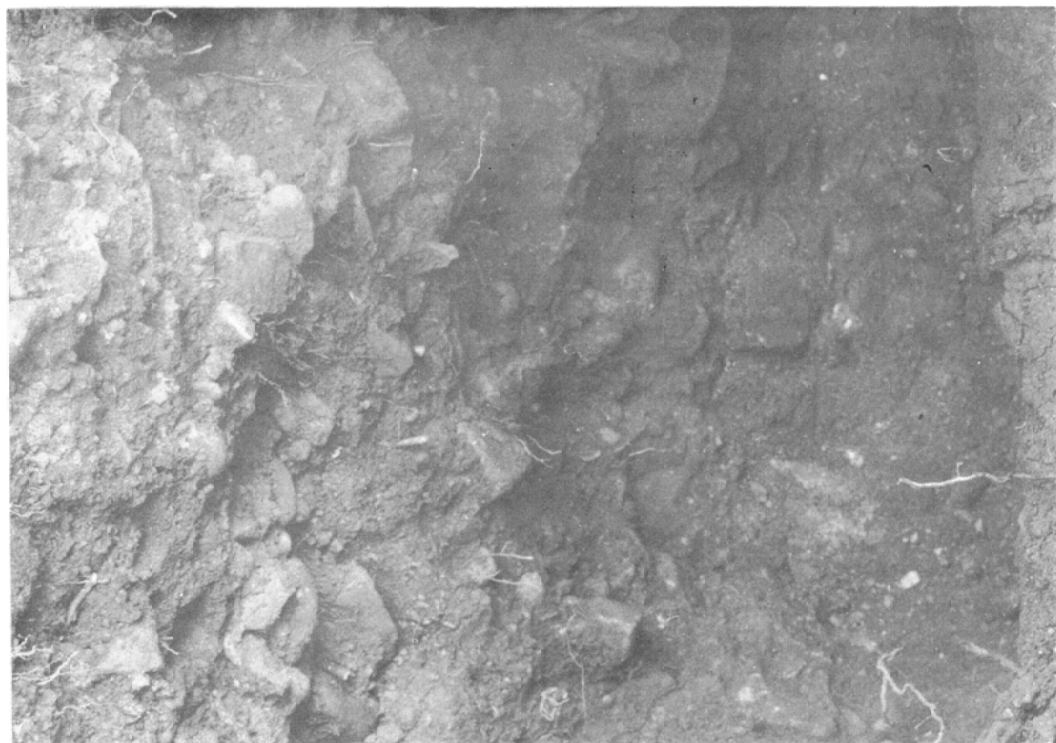
にひやく寺遺跡出土遺物 (1)



上原古墳近景



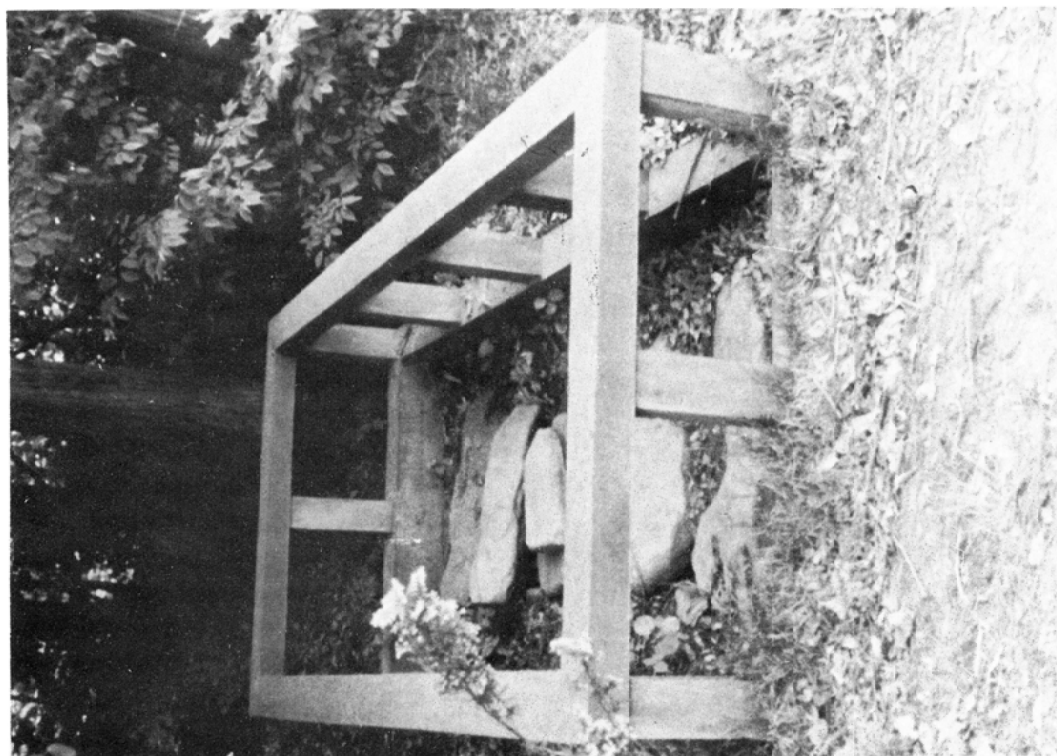
上原古墳A トレンチ状況



上原古墳A トレンチ地層断面



上原古墳石棺状況



高原古墳石棺状況



御花山古墳群遠景



塚田A 遺跡近景



塚田A 遺跡A トレンチ状況



塚田C 遺跡近景



塚田C 遺跡トレンチ状況

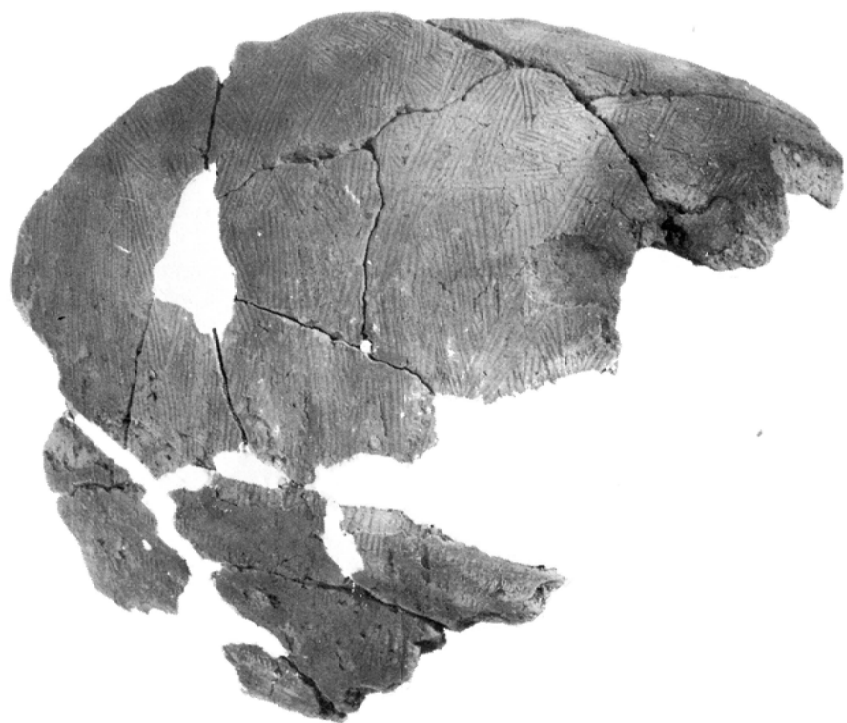


物見台遺跡近景

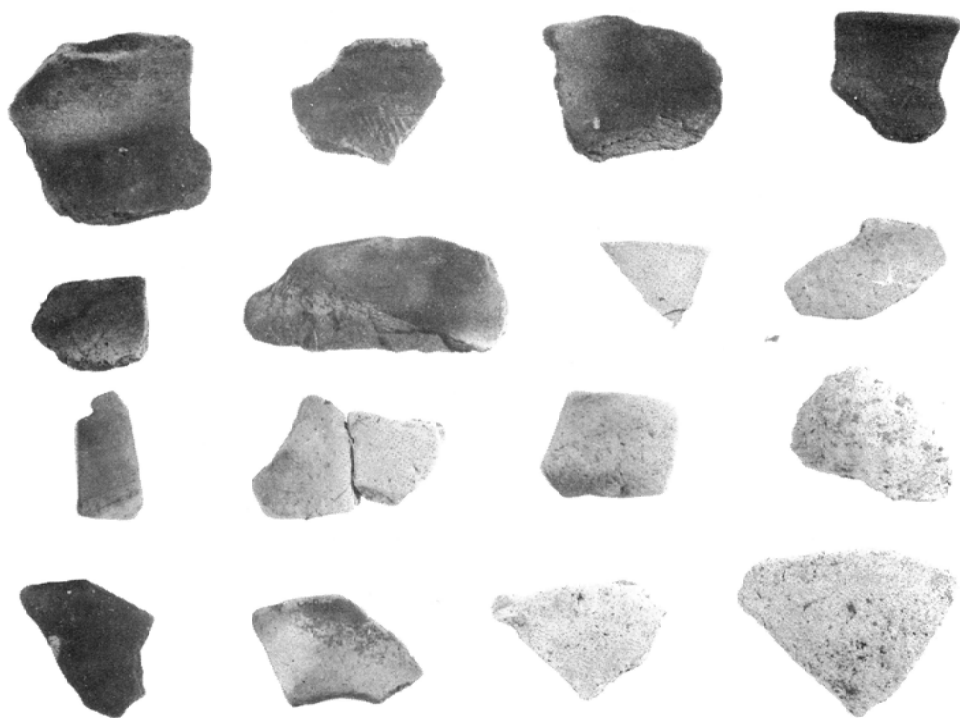


物見台遺跡トレンチ状況

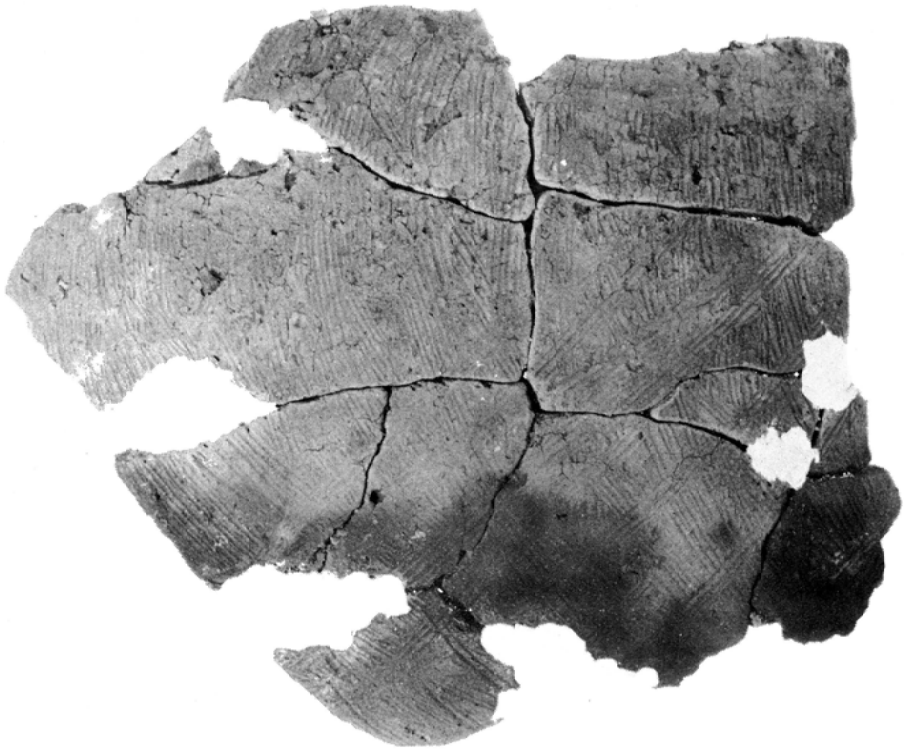




物見台遺跡出土遺物



物見台遺跡出土遺物



物見台遺跡出土遺物

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第12集

## 分布調査報告書(4)

—東北横断自動車道酒田線関係遺跡—

昭和52年3月25日 印刷

昭和52年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大風印刷

---